奈良文化財研究所 創立60周年記念 日中韓国際講演会

日中韓 古代都城文化の潮流

奈文研60年 都城の発掘と国際共同研究

2012年10月20日(土)

なら100年会館中ホール

(奈良市三条宮前町7番1号)

主催：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

後援：文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、読売新聞社、近畿日本鉄道株式会社、奈良交通株式会社

プログラム

10:00 ～ 10:10 **主催者挨拶（来賓紹介）** 3
松村　恵司（奈良文化財研究所 所長）

10:10 ～ 11:00 **飛鳥から藤原京そして平城京へ** 4
小澤　毅（埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室長）

11:10 ～ 12:00 **出土文字資料からみた平城京の役所と暮らし** 12
渡辺　晃宏（都城発掘調査部 史料研究室長）

（昼食休憩）

13:00 ～ 14:00 **漢魏洛陽城の北魏宮城中枢南部の共同調査** 22
銭　国祥（中国社会科学院 考古研究所 研究員）

14:10 ～ 15:10 **新羅王京の都市構造と発展過程** 32
黄　仁鎬（国立扶余文化財研究所 学芸研究室長）

（休憩）

15:30 ～ 16:30 **国際共同研究事業の紹介・質疑応答・講評**
進行・講評：深澤　芳樹（奈良文化財研究所 副所長）
参　加　者：小澤　毅・渡辺　晃宏・銭　国祥・黄　仁鎬・今井　晃樹・青木　敬
※プログラムは一部変更となる場合がございます

奈良文化財研究所　年表

1952（昭27）	文化財保護委員会の附属機関として奈良文化財研究所を設立
1953（昭28）	春日野庁舎へ移転
1954（昭29）	奈良国立文化財研究所に改称 唐招提寺を皮切りに南都諸大寺の調査を開始
1956（昭31）	奈文研による飛鳥地域での発掘調査を開始（飛鳥寺・川原寺・飛鳥板蓋宮伝承地の調査。～1959年）
1960（昭35）	奈良市佐紀東町の平城宮跡に発掘調査事務所を設置
1963（昭38）	平城宮跡発掘調査部を設置
1965（昭40）	平城宮第1次調査を実施
1968（昭43）	文化庁発足にともない、その附属機関となる
1969（昭44）	奈文研による藤原宮跡の継続的な発掘調査を実施
1970（昭45）	平城宮跡発掘調査部内に飛鳥藤原宮跡調査室を設置 平城宮跡資料館を開館
1973（昭48）	飛鳥藤原宮跡発掘調査部を設置
1974（昭49）	埋蔵文化財センターを設置
1975（昭50）	飛鳥資料館を開館
1980（昭55）	奈良国立博物館の仏教美術研究資料センター設立にともない、美術工芸研究室が移管 現在の奈良市二条町の庁舎に移転
1988（昭63）	飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎を橿原市木之本町に新営
2001（平13）	奈良国立文化財研究所と東京国立文化財研究所を統合し、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所となる 文化遺産研究部を設置
2006（平18）	従来の組織の再編にともない、企画調整部を設置 文化遺産研究部を文化遺産部に改称
2007（平19）	独立行政法人国立博物館及び九州国立博物館と統合し、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所となる 平城宮跡発掘調査部と飛鳥藤原宮跡発掘調査部を都城発掘調査部に統合

ご　挨　拶

奈良文化財研究所は、文化財の宝庫である奈良の地で、専門を異にした研究者が実物に即した文化財の総合調査をおこない、その成果を文化財保護行政に役立てることを目的に、文化庁の前身である文化財保護委員会の附属機関として、1952年に設立されました。今年で60年の節目を迎えます。

研究所では考古学、建築史、文献史学、庭園史、保存科学、考古科学など多様な分野の研究者が文化財に関する様々な調査研究活動をおこない、相互の交流、融合を図ることで、数多くの研究成果を挙げてきました。近年は、そうした知識や経験、技術を海外の文化財保護に役立てる機会も増えています。

研究所の仕事の中で最も大きな比重を占めるのが、飛鳥と藤原京、平城京の発掘調査です。古代国家の中枢部の発掘調査を通して、激動の東アジア情勢の中で日本の古代国家の建設がどのように進められたのか、その具体的な形成過程や特質が明らかになりつつあります。

隣国である中国、韓国との交流は、奈文研の国際交流の柱となるもので、その歴史も古く遡りますが、1991年に中国社会科学院考古研究所と、1999年に韓国国立文化財研究所との間で、日・中・韓の古代都城に関する組織的な国際共同研究が始まり、研究は今日まで継続しています。

今回、創立60周年を記念して日中韓それぞれの第一線で活躍する共同研究者による講演会を企画しました。日本、中国、韓国で明らかにされつつある古代都城文化の豊かな実像を広く皆様にお伝えし、合わせて共同研究の成果についてもご紹介したいと思います。ぜひ東アジア世界における日本の古代国家の建設と都城に思いをめぐらせてください。

この国際シンポジウムが、日中韓三国の一層の相互理解の深化と、さらなる友好関係の発展に役立てば幸いです。

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
所長　松村　恵司

飛鳥から藤原京そして平城京へ

埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室長　**小澤　毅**

飛鳥諸宮の展開

592年に推古天皇が豊浦宮に即位したのち、694年の藤原京遷都までは、飛鳥周辺に宮殿が集中的に営まれた。いわゆる飛鳥時代である。ただし、当時、飛鳥とよばれた範囲はかぎられており、平地部分では南北1.6 km、東西0.8 kmほどにすぎない。その北側は小墾田、南側は橘とよばれ、飛鳥川をはさんだ小墾田の西岸が豊浦であった。

豊浦宮は、蘇我氏の邸宅の転用と推定され、不備な部分も多かったらしい。600年に隋との国交が開始され、両国間を使者が往還するようになると、小墾田宮を造営して、603年に移っている。外国の使節を迎えるのにふさわしい宮殿を新造したのだろう。

一方、それにつづく舒明天皇以降の飛鳥諸宮は、宮号に「飛鳥」を冠するように、狭義の飛鳥の地に建設された。飛鳥岡本宮（630～636年）、飛鳥板蓋宮（643～655年）、後飛鳥岡本宮（656～672年）、飛鳥浄御原宮（672～694年）の四宮である。

これらの宮殿の位置については論争があったが、1959年以来継続している発掘調査で、大きく3時期（Ⅰ期～Ⅲ期）に区分される遺構群を確認し、飛鳥寺南方のほぼ同地に重複して存在したことが判明している。出土する土器や木簡の年代からみて、Ⅰ期が飛鳥岡本宮、Ⅱ期が飛鳥板蓋宮、Ⅲ期が後飛鳥岡本宮と飛鳥浄御原宮と考えられる。

こうした状況は、当時の宮殿がすでに天皇一代かぎりのものではなく、より長い年月にわたって維持されていたことをものがたる。実際、飛鳥板蓋宮は皇極・斉明の二代の天皇、後飛鳥岡本宮は斉明・天智・天武の三代の天皇、飛鳥浄御原宮は天武・持統の二代の天皇が使用しており、7世紀中葉以降の大和の王宮は、火災によって一時的に移動した場合を除くと、実質上、この場所に固定していたといってよい。

小澤　毅（おざわ・つよし）
埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長
1958年　静岡県生まれ
1985年　広島大学大学院文学研究科博士課程後期中途退学
1985年　奈良県立橿原考古学研究所技師
1989年　奈良国立文化財研究所研究員
1993年　奈良国立文化財研究所主任研究官
2006年　現職
現在の専門分野は、日本考古学。

多年にわたる発掘調査で、日本の古代都城の姿はかなり鮮明になってきました。そうした成果にもとづき、7世紀の飛鳥から藤原京、そして8世紀の平城京にいたる都の構造の変化をたどってみたいと思います。とくに、条坊とよぶ街割りをそなえた最初の都城である藤原京が建設された意義と、それを捨てて平城京へ遷都した理由を、両京に共通する部分と異なる部分に着目することで明らかにしたいと考えています。

飛鳥の防衛施設と百済王京の影響

『日本書紀』の656年の記事には、田身嶺（多武峰）の頂上に垣をめぐらせ、嶺の上に両槻宮を営んだこと、「狂心渠」とよばれる渠を掘らせたこと、200隻の舟に石を積んで「宮の東の山」に運び、垣をつくったことがみえる。

こうした記事を裏づけるように、1992年には、酒船石遺跡の丘陵で、壁面に砂岩切石を積みかさねた版築土塁が確認されている。その後も、丘陵の東側で、谷川を改修した大規模な流路が見つかった。ただし、多武峰の稜線上にあった両槻宮を、酒船石遺跡の丘陵上に想定する説は成立せず、これらを本格的な山城造営とみるのはむずかしい。

663年に、白村江で唐・新羅連合軍に大敗を喫した日本は、両国による侵攻が現実の脅威となったなかで、九州北部から瀬戸内をへて畿内にいたる長大な防衛ラインを強化し、数多くの朝鮮式山城を構築した。667年には、都も近江大津宮へ移している。

近江遷都以前の大和でも、王権の中枢である飛鳥の防衛が図られたことは想像にかたくない。守るべき

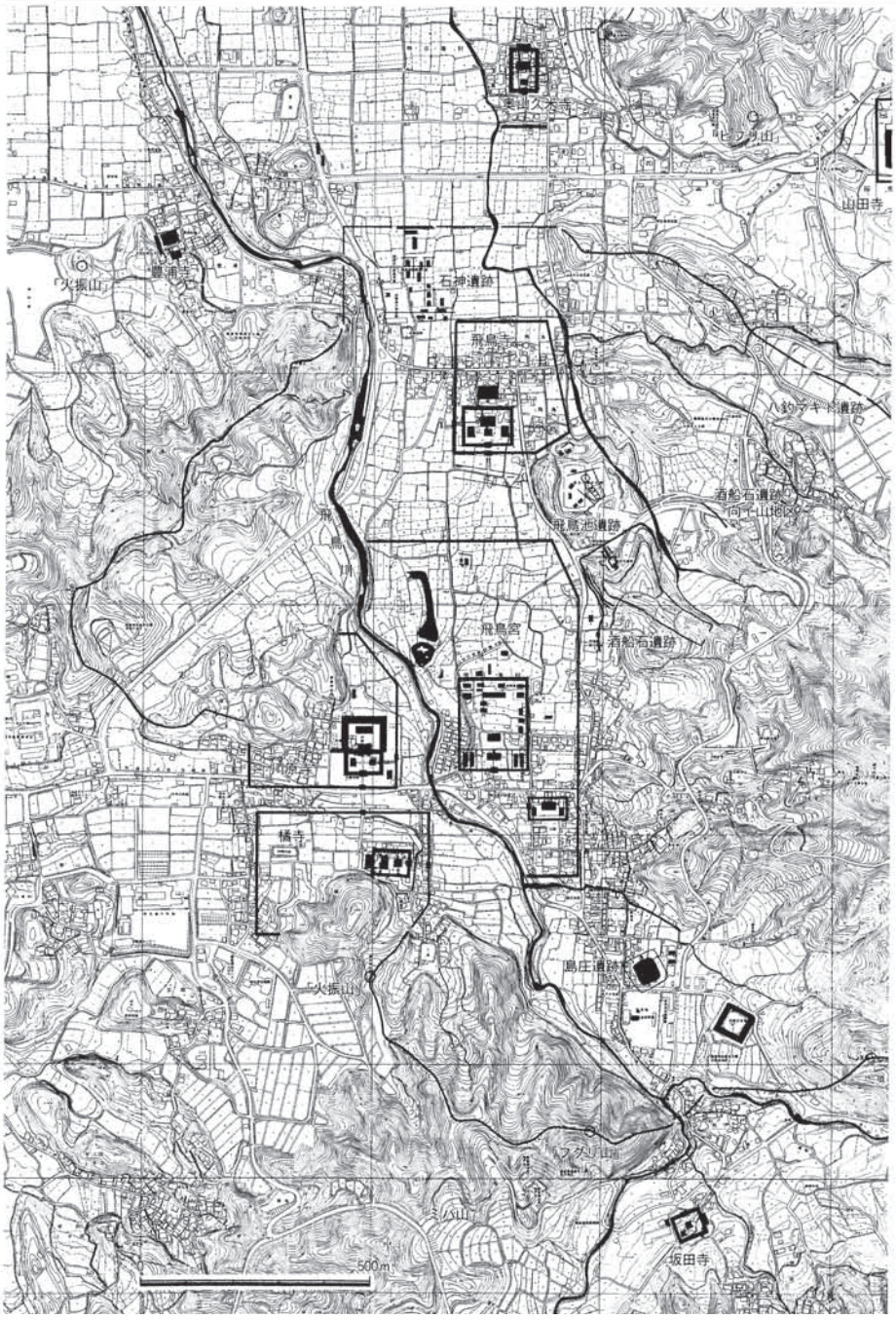

図1　飛鳥諸宮と防衛施設（相原嘉之「倭京の“守り”」より）

対象とは、まず第一に後飛鳥岡本宮であったはずであり、実際、その東方の丘陵では、断片的ながら、尾根筋に設けた掘立柱塀を確認している。飛鳥の中枢部を守る羅城的施設としての性格が想定される（図1）。

また、当時の主要交通路である紀路沿いで検出された狼煙台（森カシ谷遺跡）や、飛鳥周辺とその西方に広がる「ヒブリ山」の地名などとあわせて、飛鳥をとりまく防衛体制が構築されていたこともうかがえる。このほか、飛鳥寺をはじめ、宮のまわりに配された寺院や宮殿関連の施設は、有事のさいには防御拠点としての機能を果たすことができた。これらが、全体として飛鳥の防衛をになったものと推定される。

そうした防衛体制の整備には、『日本書紀』の665年の長門と筑紫の山城造営記事が示すように、亡命百済人が重要な役割を果たしたと考えられる。唐・新羅連合軍によって陥落した百済最後の王京である泗沘は、王宮を中心として、北側の扶蘇山城から発した羅城がとり囲んでいた（南と西は白馬江が天然の防塁となるため、それに面した側の羅城は存在しなかった可能性が高い）（図2）。

図2　泗沘都城（朴淳發「百済泗沘都城の羅城構造について」より）

飛鳥諸宮も、自然地形を除く基本的な構成要素はこれと共通する部分が多い。当時の両国の密接な関係と、亡命百済人たちが知る直近の防衛体制が百済王京のそれであったことを考えれば、白村江の敗戦後の日本の防衛体制の構築が、百済王京の直接的な影響下におこなわれたことは確実視してよいだろう。

半島情勢の転回

670年に入って、朝鮮半島の情勢は大きな転換をみせる。唐と同盟して668年に高句麗を滅ぼした新羅が、唐に対する全面的な抗争にふみきったのである。もっとも、新羅は、高句麗滅亡の直前にも、調を進める使者を日本に送っており、その後も頻繁に使者を派遣して接近を図った。戦勝国でありながら国交回復に執着したのは、唐との抗争を控えた新羅側の戦略であり、日本が唐側につくのを防ぐためとみられる。以後も、唐との対立的状況がつづく間は、新羅は日本との親交関係を決して崩そうとはしなかった。

こうした唐と新羅の抗争が、日本にとって歓迎すべきものであったことは疑いない。また、671年には、唐からも二度にわたって使者が送られてくる。うち一度は、2,000人という大集団で、白村江の戦いの捕虜を送り届けたらしい。敵対関係となった新羅への対抗上、唐としても積極的に日本との修交を図ったものとみられる。

結局、日本はいずれの国に対しても援軍を送ることはせず、傍観的立場をとる。とくに唐に対しては、これ以後、約30年間にわたって正式な通交をおこなわず、消極的な姿勢に終始した。一方、新羅とは頻繁な使節の往還をおこない、関係の維持に努める。そして、676年、新羅は唐の勢力を朝鮮半島から駆逐し、半島全体の掌握をなしとげる。

このように、白村江の敗戦後の危機的状況から脱却したのち、672年の壬申の乱で勝利を収めた天武天皇は、大津宮を放棄して、飛鳥へ還都した。

これが、686年に飛鳥浄御原宮と命名された宮殿であり、後飛鳥岡本宮を継承・拡充するかたちで成立したものと推定される。おそらく、後飛鳥岡本宮を中心に構築されたさまざまな施設も、そのまま受けつがれたのであろう。

藤原京の造営とその特質

ただし、飛鳥浄御原宮は、律令国家の建設をめざす当時の朝廷にとって、とうてい充分なものとはいえなかった。そこで、周囲のかぎられた空間に必要な施設を配する一方、新都の探索が早い段階から開始される。そのさきがけとなったのは、676年の「新城（にいき）」造都記事であり、以後、682年から684年にも新都の探索と巡行の記事が頻出する。

こうした一連の動きは、『日本書紀』の684年3月の「天皇、京師（けいし）を巡行して宮室の地を定む」という記事をもって終わりを告げる。この最後の「宮室」と「京師」が藤原宮と藤原京を指し、これにさきだって見える「新城」が、同じく藤原京にあたることは確実である。「新城」は、古い京に対する新しい都城の意味と考えてよい。ただし、その造営は、天武の死去（686年）と葬儀、皇太子草壁（くさかべ）の早世（689年）のため中断し、持統天皇即位後の690年10月に再開されて、694年12月の遷都を迎えることになる。

藤原京の最大の特徴は、広大な京域をもつ点にあり、それは基本的に官人の居住空間であった。各地の氏族は本拠地を離れ、ここにはじめての都市住民となる。そして、彼らに位階に応じた宅地を分け与えるため、縦横の道路で区画した方眼状の街割り（条坊）がつくられた。藤原京は、日本最初の条坊制都城として建設されたのである。

なお、その京域については、1坊を4町（約265m四方）とし、南北12条（約3.2km＝6里）×東西8坊（約2.1km＝4里）と想定する復元案が、長く通説としての位置を占めてきた。しかし、1979年以降、この復元では京外にあたる部分からも、条坊に一致する道路が次々と見つかり、宅地の状況も内外で差が認められないこと、1坊が平城京以後の都城と同じく、16町（約530m四方）であったことが確実となる。

そして、1996年の東西京極の確認で、京の東西幅は約5.3km（10里）と確定し、2004年には北京極とみられる道路も検出された。南北の京域も東西に近い広がりをもつこと、宮が京全体の中央か、少なくともそれに近い位置を占めることは間違いない。律令の条文や、南端の十条部分（右京十条二坊）の存在を強く示唆する「軽坊（かるまち）」木簡の存在を考えあわせれば、藤原京域は10条×10坊（10里四方）の正方形とみるのが妥当であり、藤原宮は正しくその中央に配置されていたと推

定される（図3）。

以上のような藤原京の形態は、ほかの日本都城とは大きく異なり、時期の近い中国都城にも類例がない。その反面、『周礼』考工記の記述と多くの点で一致し、藤原京のモデルは、『周礼』に記される都城の理想型にあったと判断される。そこには、現実の中国都城についての情報不足が大きく関係していた。遣唐使の派遣が669年から中断し、新羅経由の情報こそわずかに得られたものの、中国からの直接情報がとだえたなかで、日本は律令国家の建設を推進せざるをえなかったのである。藤原京の造営は、『周礼』や唐の永徽律令など、机上の知識にもとづいて計画され、実行に移された可能性が高い。

なお、藤原京には、外周を囲む羅城が存在しない。従来のように局地的な防衛施設に頼るのではなく、国家全体としての広汎な防衛が図られ、条坊制都城は、その中枢として、天皇を頂点とする権力を内外に誇示する役割を果たすようになる。それは、唐の強大な国力を目の当たりにした日本が、中国に倣った国家体制の整備を急ぎ、権威の象徴としての都城を建設する必要に迫られた結果にほかならなかった。

藤原京に対する新羅王京の影響

では、藤原京に対して、当時頻繁な交流のあった新羅の王京はどの程度の影響を与えたのだろうか。詳細については黄仁鎬氏の報告に譲るが、新羅王京の坊里（条坊）には方位や方格の大きさを異にする複数の規格が存在したこと、道路の幅員も多様なことが確認されている。これらは、王京が全域にわたって同時に設定されたのではなく、当初は、王宮である月城や皇龍寺

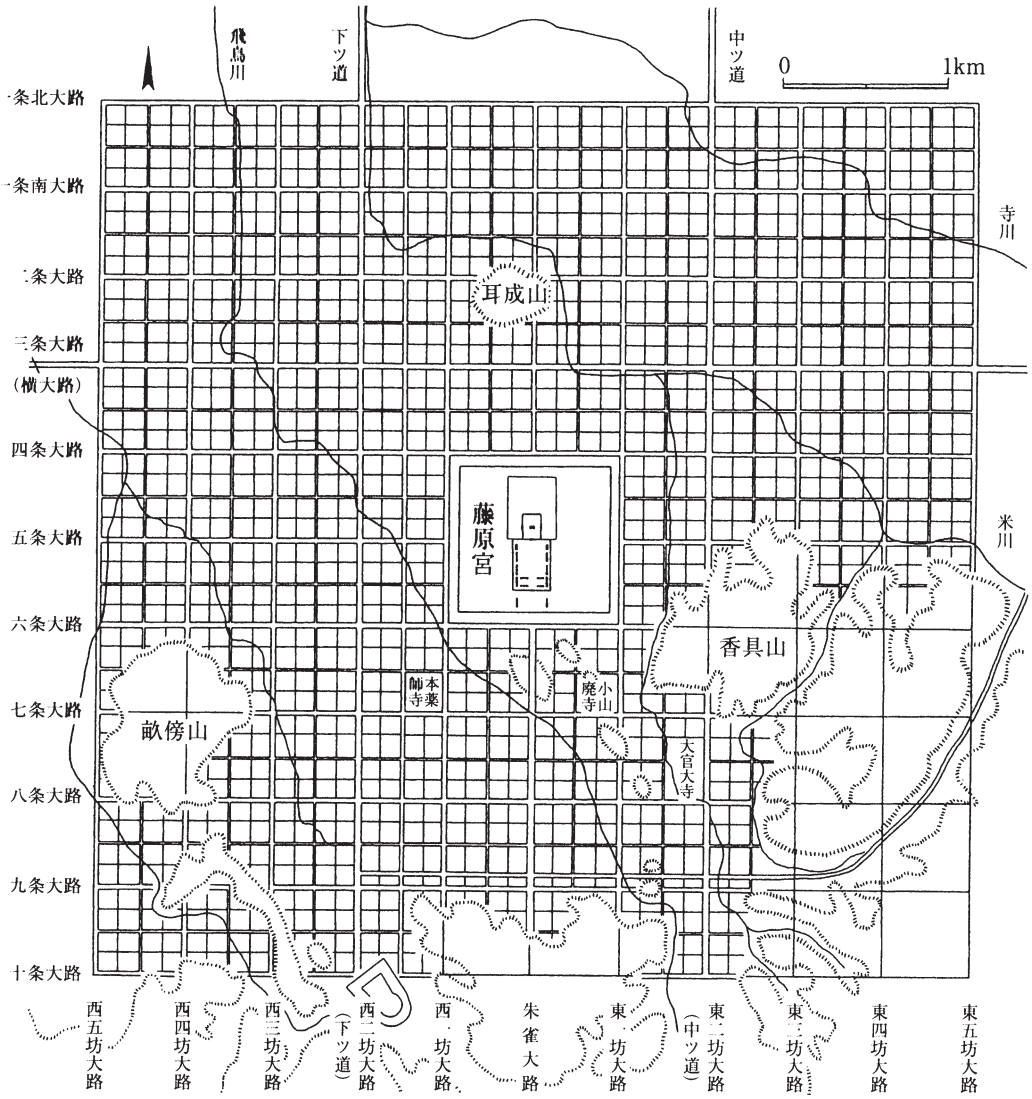

図3　藤原京（筆者作成）

付近など、中枢部のかぎられた地域が整備されるにとどまり、時間の経過とともに拡大されていった状況をものがたる。

また、藤原京が正方形の京域の中心に正方形の宮をおく、きわめて単純な求心的設計によるのと異なり、いずれの段階でも、月城の位置は王京の中心からははずれ、王京全体に対する月城の中心性は乏しい。くわえて、黄氏の分析では、王京の最小行政区域を設定する坊墻（ぼうしょう）と坊墻の間が、一定の間隔（60大尺＝21.3 m、40大尺＝14.2 m、20大尺＝7.1 m）の道路敷地として確保され、それに宅地規模をあわせた長さが基本単位となって、3段階の地割体系をなしたとされる。これは、藤原京の条坊が、道路心を条坊計画線として等間隔（375大尺＝約133 m間隔）に設定され、道路幅の差による宅地面積の不均等を生じているのとは、まったく状況を違えるものである。

以上のように、新羅王京の形態や坊里の設定は、宮を中心とする簡明な設計原理が京域全体を貫いていた藤原京とは異なる点が多く、藤原京に新羅王京の直接的な影響を認めるのは困難である。

この時期の新羅は、対唐政策の必要上、あえて辞を低くして日本との通交を積極的に求めたが、それは、新羅など朝鮮半島諸国を「蕃国（ばんこく）」（従属国）とみる対外観の形成にもつながっていく。そして、日本は、新羅を唐風化の手本とし、情報や文化の伝達者として利用しつつも、これを朝貢国（ちょうこうこく）とみなし、日本を「小中華（しょうちゅうか）」とする華夷（かい）秩序の構築を図ることになる。もちろん、それは主観的な日本中心主義にすぎなかったが、こうした点からも、「小中華」の威容を内外に示す役割をになった都城の建設にさいして、新羅の王京を模倣したとは考えがたい。

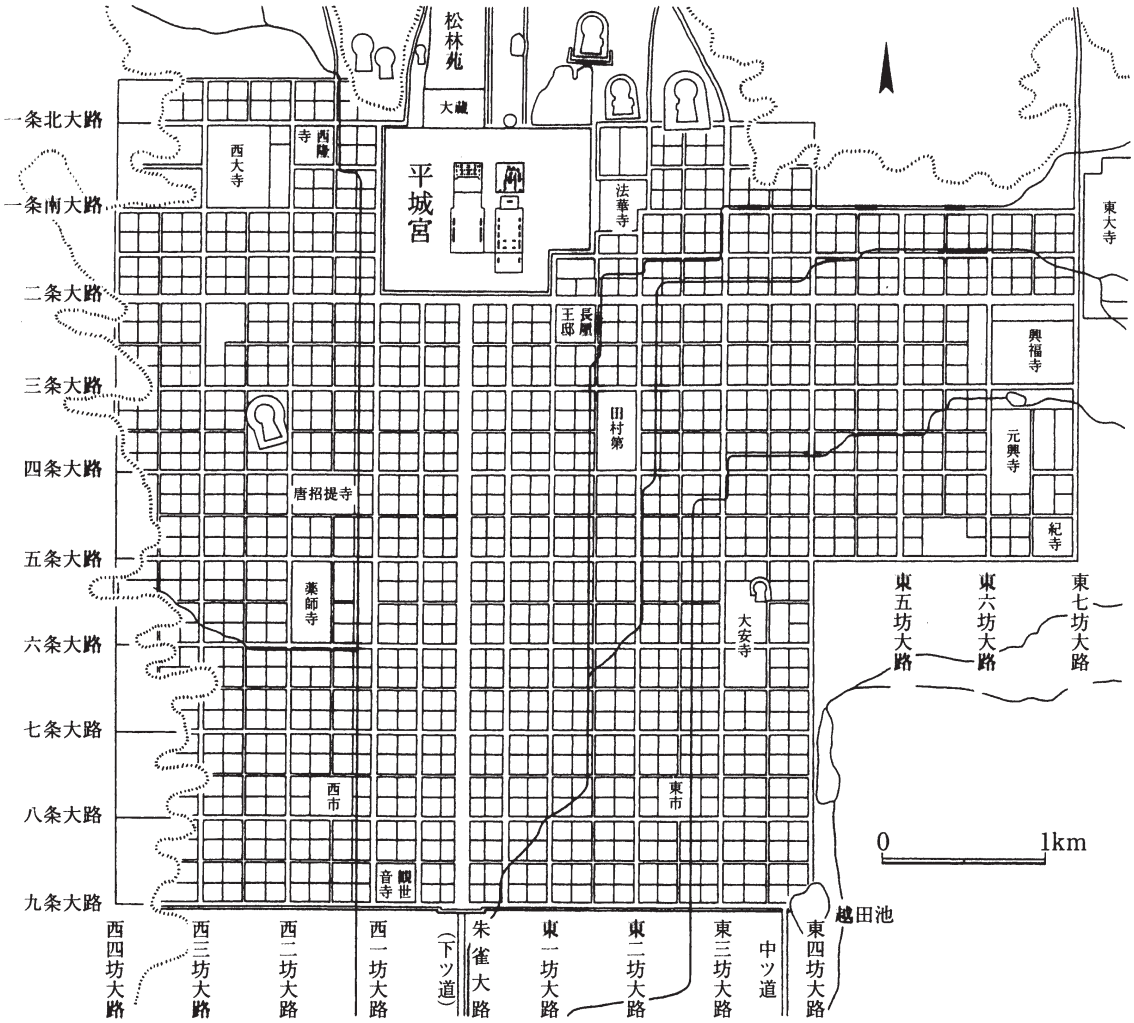

図4　平城京（筆者作成）

平城遷都

ただし、藤原京には、その成立の経緯もかかわって、さまざまな限界が存在した。たとえば、南東が高く、北西へ向かって低くなる地形は、南面する天皇にとってふさわしいものではない。また、平城京以後の羅城門や朱雀大路（すざくおおじ）が、対外的にも国家の威容を誇示する舞台装置としての役割を果たしたのに対し、藤原京には羅城や羅城門もなく、朱雀大路の幅も平城京の1/3と貧弱である。

これらの問題点が明確に認識されたのは、再開された遣唐使の帰国報告に接した時点であろう。唐との国交を断って内政に専念した日本は、701年に大宝律令を完成させ、律令国家としての体制を整える。そして、三十数年ぶりの遣唐使を送り、彼らは704年7月に帰国して、久しぶりに中国についての生の情報を持ち帰った。当然、唐の長安城に関する最新の知見ももたらされたが、そこで明らかになったのは、藤原京と長安城のあまりにも大きな隔たりと、都城としての藤原京の欠陥であったはずである。

こうした衝撃が、ようやく完成を迎えつつあった藤原京を捨て、新しい都の建設に向かわせることになる。ほどなく、幹線道路の下ツ道（しもつみち）を北上した奈良盆地北端の地が選ばれて造営が開始され、710年には新都平城京への遷都がおこなわれた。平城京は、南へ向かってなだらかに傾斜する理想的な地形に立地し、京域は南北9条（約4.8km＝9里）×東西8坊（約4.3km

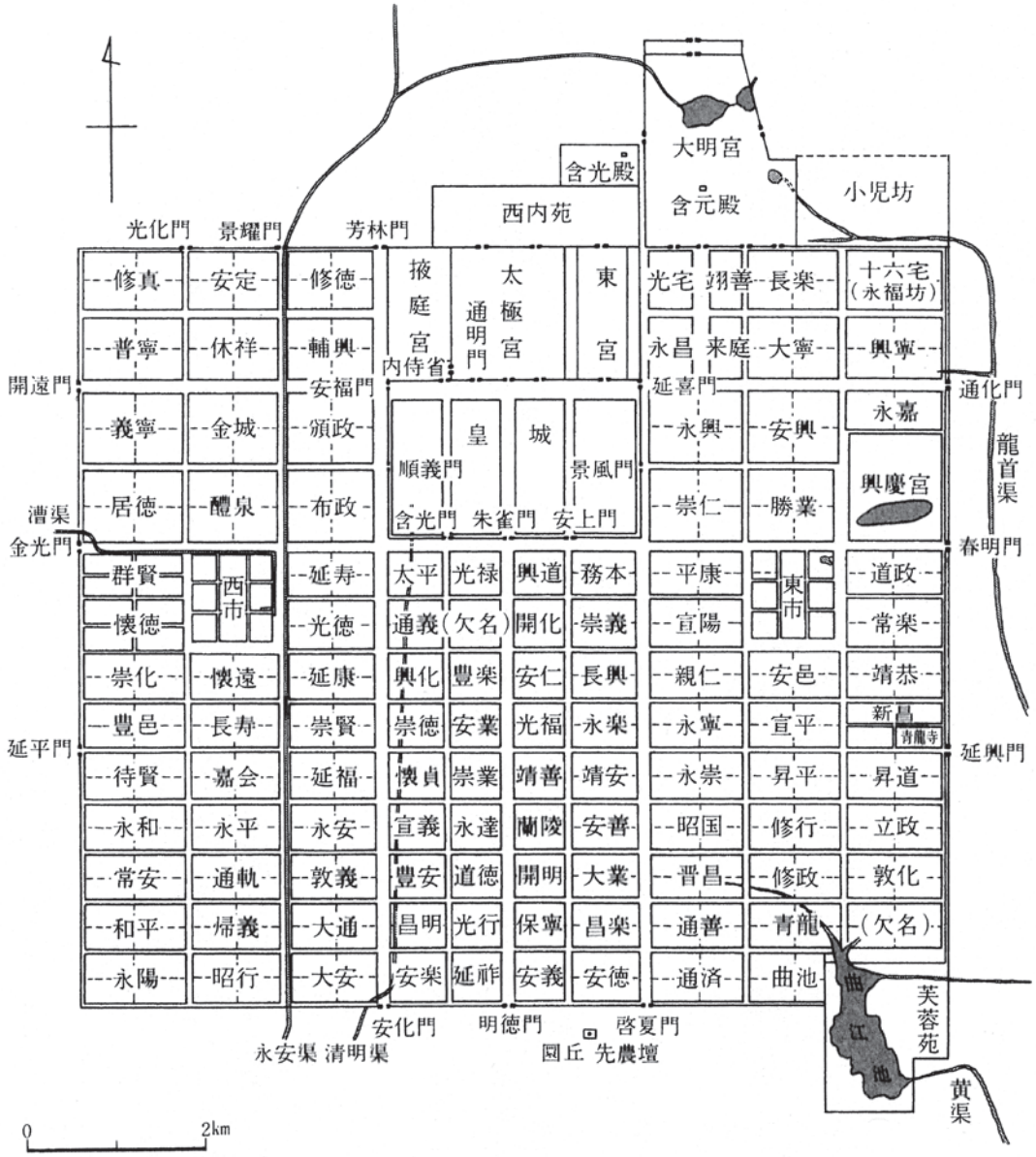

図5　唐長安城（岸俊男「日本都城制総論」より）

＝８里）の長方形の部分と、その東側の南北４条分（約2.1 km＝４里）×東西３坊分（約1.6 km＝３里）の外京とよぶ部分からなる（図4）。

なお、2005年に、左京十条にあたる地域で、短期間のうちに廃絶した条坊が確認されたため、京域は当初十条であったものを縮小したとする見解がある。しかし、そこは、盆地全域におよぶ大和統一条里とは異なる京南辺条条里が、左京南辺にのみ遺存する区画にほかならず、あくまで羅城の外側の京外であった。大和統一条里をこわして、この部分にもいったん条坊を施工したことが、右京南辺には存在しない特殊な条里の形成につながったと判断できる。大和統一条里が平城京に先行することを裏づける成果といえるが、京域の広がりに直接結びつけることはできない。

平城京の特質と唐長安城の影響

都の中枢である平城宮は、藤原京とは異なり、京域の北端に位置していた。この点は唐の長安城と一致し、以後の日本都城の多くに踏襲される。また、朱雀大路は、幅約74 mと藤原京の３倍に達する隔絶した規模をもち、その南端には、巨大な羅城門がそびえ立っていた。これらは、規模の点ではおよばないものの、明らかに長安城の朱雀大街や、その南端に位置する明徳門を受けついだ要素といえ、都の正面性が強調されたことがわかる。正面となる南側にのみ、羅城を設けるのもそのあらわれである（図5）。

このほかにも、平城京への遷都にあたって構造上変化した部分には、長安城との共通性を明瞭に示すものが少なくない。京の東南角を欠いて池を設けること、宮の北に大規模な苑池をおくこともその一つであり、平城宮中央区の大極殿が建つ区画は、長安城大明宮の含元殿の模倣と考えられている。平城京の成立にさいして、長安城の詳細な情報がもたらされ、決定的な影響を与えたことは疑う余地がない。

もっとも、一方では、藤原京から連続する要素も存在した。たとえば、条坊の規格や大路以外の道路幅は基本的に両京で一致し、京内の寺院や邸宅の配置にもある程度の共通性が認められる。また、藤原京の南端部分は地形上、宅地としての利用がむずかしく、南北方向の実質的な京域は九条分に近かったと推定されるが、平城京が九条となったのは、その反映である可能性が高い。さらに、藤原宮の建物の多くは解体されて平城宮へ運ばれたことが判明しており、平城宮中央区の大極殿そのものも藤原宮大極殿の移建と考えられる。いわば、平城京は、当時の国力と政治的・社会的諸条件による制約のなかで、唐の長安城と藤原京をわが国なりに止揚した都城だったのである。

都城造営のモデル

以上のように、飛鳥諸宮の後半段階における防衛体制の整備では、王京の泗沘をはじめとして、百済のそれが直接のモデルとされた可能性が高く、亡命百済人が大きな役割を果たしたとみられる。

一方、日本の律令制都城の成立を示す藤原京は、実在の都城ではなく、『周礼』などに記された中国都城の理想型を体現するかたちで建設された。それを生んだのは、660年代以前の文化交流であり、書物を介した中国都城の間接的な影響によるものといえる。

これに対して、律令制都城の完成と位置づけられる平城京は、藤原京の要素をある程度受け継ぎつつも、唐の長安城の模倣のうえに成立した。そこには、702年に再開された遣唐使による、長安城の直接的な影響があったことが確実である。

白村江の戦後処理に追われた天智朝（660年代）と、藤原京の建設に着手した天武朝（670～680年代）、そして平城京への遷都が決断された文武朝（700年代）では、直面する国際情勢に大差があり、それぞれの時点で求められた都城の形や役割にも違いがあった。したがって、おのおののモデルとなった都城も異なり、それは日本の国家体制が整備されていく段階の差を示すものでもあったのである。

出土文字資料からみた平城京の役所と暮らし

都城発掘調査部 史料研究室長　**渡辺　晃宏**

はじめに ― 平城宮の発掘調査と木簡の発見

半世紀以上に及ぶ平城宮跡の発掘調査において、最も特筆すべき発見の一つに木簡の出土がある。平城宮跡最初の木簡の発見は1961年1月のこと。遷都1300年の年に復原が完成した第一次大極殿の北側にあたる地区での発掘調査成果であった。以来半世紀を経て、平城宮跡からは10万点近い木簡が見つかり、さらにその南と東西に展開する都市平城京からも、12万点に及ぶ木簡が出土している。木簡の使用はその後、近代にまで連綿と続いたが、使用の最盛期は7世紀末から8世紀いっぱい。奈良時代はまさに木簡の世紀であり、奈良の都平城京は木簡の都であった。

1. 資料としての木簡

文字資料としての木簡　木簡には3つの大きな役割がある。一つめは、文字資料としてのはたらきである。歴史を組み立てるための素材（資料）は時代を遡るほど数が減るため、古い時代ほど新しい資料の発見への期待が大きくなる。701年に大宝令が施行されるまで、地方行政組織のコホリは「評」と表記されていたことを明らかにし、大化の改新の史料が8世紀の知識で書き直されている部分があることを証明したのは木簡だった。また、実態のわからなかった贄という天皇の食料貢進制度の存在を明らかにしたのも木簡だった。

木簡は当時の人が実際に使った、いわば生の資料であるから、原則として当時の実態を反映しているとみてよい。こうして木簡は、7、8世紀の歴史を組み立てるのに不可欠な存在となった。

考古資料としての木簡　二つめは、考古資料としてのはたらきである。文書の場合、伝来過程がその真実性の根拠となるように、木簡のような出土文字資料の場合には、どの地点でどの土の中から見つかったかが、

渡辺　晃宏（わたなべ・あきひろ）
都城発掘調査部 史料研究室長
1960年　東京都生まれ
1989年　東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1989年　奈良国立文化財研究所研究員
1994年　奈良国立文化財研究所主任研究官
2001年　現職
現在の専門分野は、日本古代史。

平城宮・京の発掘調査では、木簡や墨書土器をはじめとする文字資料が多数見つかり、歴史を組み立てる上で欠かせない資料となってきています。これらの出土文字資料が、発掘調査のなかでどのような役割を果たすようになってきたか、出土文字資料のもつ資料としての特徴にも注意しながら、平城宮内の役所と京内の宅地の実際の調査事例に即して、具体的に明らかにしていきたいと考えています。

資料としての信頼性の証しになる。出土した地点・層位が文字資料としての木簡にさらに大きな事実を語らせることもある。平城宮大極殿院の築地回廊の下から見つかった和銅三年の荷札が、平城遷都時の大極殿未完成という思いがけない事実を明るみに出したことが記憶に新しい。

また、それと同時に、木簡は同じ土に含まれている他の種類の遺物に対して、文字情報を与えてくれる。ことに重要なのは年代である。土器や瓦の編年に絶対的な年代を与えるのは、一緒に出土する年紀の書かれた木簡なのである。

木製品としての木簡　三つめは、木製品としての木簡のはたらきである。木簡は単に墨書媒体として木を用いているわけではない。何度も削り直して再利用できたり、丈夫で壊れにくかったりという、木のもつ特性を生かしつつ、用途に応じて紙と使い分ける紙木併用というのが木簡使用の実態だった。言い換えれば、木簡は情報伝達のために用いられた木製品といってもよいわけである。

このように、木簡を中心とする出土文字資料のもつ意義には大きなものがある。発掘調査を進めていく際にも、遺跡や遺構の性格を考えるための重要な素材を提供してくれる。ここでは、平城宮・京の発掘調査において、出土文字資料がどのような役割を果たしてきたか、具体的に紹介してみたい。

2. 式部省の発見と出土文字資料

式部省とは　律令制の八省の一つに、式部省という役所がある。役人の人事を担当する役所で、役人養成機関である大学寮もその管轄下に置いていた。平城宮の役所配置は伝わらないため、発掘調査で見つかった役所の比定は難しい場合が多いが、式部省については例外的にその所在がよくわかっている。それはひとえに木簡の発見によっている。

SD4100の木簡と式部省の最初の想定　平城宮跡で最初に式部省の所在地を示唆したのは、1966年に宮東南隅で行われた発掘調査でみつかった、13,000点に及ぶ役人の勤務評定の削屑の発見だった。役人の勤務評定は考課と呼ばれる毎年の勤務評定と、その一定年数の積み重ねによる選叙と呼ばれる位階昇進の2段階で行われる。そのいずれにおいても役人一人ずつの個人カードと言ってもよい木簡が作成されていた。位階・官職・姓名・年齢・本籍地の記載を基本とし、ここに出勤日数や評価など書き加えられる。形態的には、いろいろな観点から並べ替えて管理できるよう、横に並べて固定するための紐通しの孔が側面に穿たれているのを特徴とする木簡で、評定が終われば、側面の孔が表面に出てきて使えなくなるまで何度も削り直して再利用された。そうした勤務評定の削屑が平城宮東南隅に近い、南面の築地大垣の内側、北側の役所との間を西から東に流れる東西溝SD4100からまとまって見つかったのである。

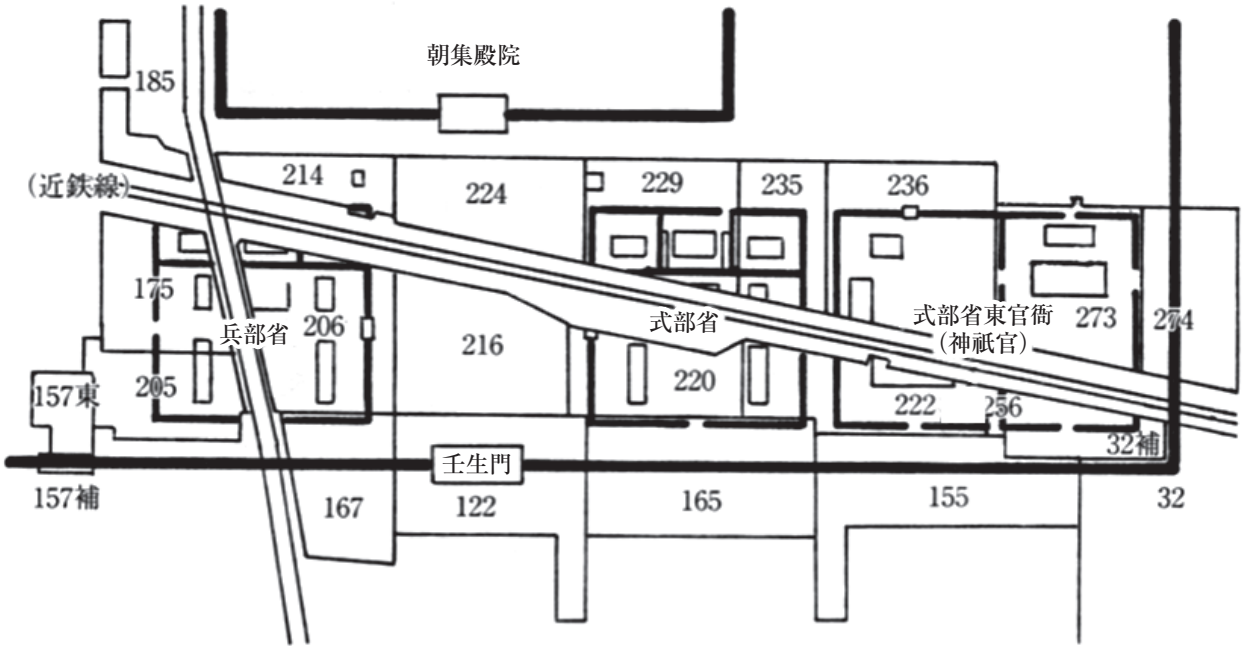

図1　東区朝堂院南方官衙と調査区の位置(数字は調査次数)

役人の勤務評定は、まずその役人が所属する各役所で行われ、ついでその結果が式部省（武官は兵部省）に送られ審査が行われる。このため、勤務評定木簡はどの役所で見つかってもおかしくはないわけだが、SD4100の勤務評定木簡には、式部省の役人に関わるものと、複数の役所の役人に関わるものが含まれていた。これは式部省で使われた木簡の削屑であることは間違いない。

従って、SD4100の木簡は、式部省の所在地を考える有力な手がかりになるはずだが、ネックになるのは、溝という、水流がありしかも長期にわたってゴミが流れ込み得る遺構の遺物だったことである。しかも、溝のすぐ北側の役所では鍛冶工房の遺構が見つかっていた。このため、隣接地という点では北側の役所を式部省の候補地と考えるのが最も穏当だが、工房は式部省にそぐわないとみて、もう一つ北側の役所を想定する見方もあった。当然、溝の上流にあたる朝集殿院南面も候補地たり得たはずだが、理由はわからないが、ここを想定する意見は出なかったようである。

SD4100の削屑は、1961年に平城宮跡で最初に木簡が見つかってからわずか5年後、しかも5桁に及ぶという厖大さの陰に隠れてしまった感もあるが、実は出土地点と内容に面白い相関関係があった。削屑は40ｍ近くにわたって分布していたが、大半が式部省の役人の勤務評定の削屑で770年前後のものであるのに対し、式部省以外の複数の役所に関わる勤務評定の削屑が西端の一部にだけ含まれ、しかも720年代のものだったのである。

南面大垣を横切る南北溝SD11640の木簡　SD4100出土木簡の謎は、その後1984年にSD4100の南の南面大垣部分の調査が行われるに及んで解決をみることになる。この調査によって南面大垣を横断する南北溝SD11640が見つかり、720年代の式部省に関わる木簡が1,000点余り出土した。この時の木簡には、「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた棒軸の完形品が含まれ大きな注目を集めたが、大事なのはむしろ、木簡群全体としてみれば720年代の式部省関係の木簡として括ることができ、前述のSD4100出土木簡のうち西端の異質部分と共通する性格ももっていたことである。この部分はちょうど新たに発見された南面大垣を横断する南北溝SD11640がSD4100から分岐する部分にあたっていて、本来はSD11640の遺物として認識すべきものだったことがわかったのである。

この結果、奈良時代を通じて式部省はこの周辺にあったが、前半の遺物が南北溝SD11640に、後半の遺物がSD4100のそれより東の部分に分布していることがわかった。式部省の位置が奈良時代を通じて動いている可能性が考えられ、古い時期のものが西寄りにあった可能性が想定されることになる。しかし、SD11640の発見だけでは、それ以上式部省の所在を考えるための素材は得られなかった。

双子の官衙、式部省・兵部省の発見　平城宮の式部省の所在地に手がかりを与えたのは、1987年に一部着手され、1989年から1992年にかけて実施された、東区朝堂院南方官衙の一連の調査であった。宮南面東門である壬生門の内側にあたるこの地域に、東西対象に築地塀に囲まれた役所があったことは、既に1985年の段階の南面大垣の調査で明らかになっていた。その北側部分に本格的な調査が展開したのである。

そこで明らかになったのは、壬生門から朝集殿院に向かう道路の東西に対称に置かれた、それぞれ一辺約74ｍのほぼ正方形の区画に8棟の礎石建物を整然と配置するきわめて格式の高い2つの役所であった。北限から20ｍの位置に東西塀を設け、北側にはそれぞれ区画塀で区画された実務空間と思われる3棟の東西棟建物が、また南側には中央北端に配置した東西棟の正殿と、その南に展開する広場空間を挟んで東西に置かれた各2棟の南北棟の脇殿の計5棟の建物が、南に開いたいわゆるコの字型に配置され、儀式空間を構成していた。2つの役所は細部では違いがあるものの、大局的に見ればいずれも南を正面とするほぼ同一の構成をとる一方、西の役所は東門を、東の役所は西門を八脚門として、宮内道路側に正門を設けており、全体として高い計画性が窺えた。

役所名を示唆する文字資料は、残念ながら役所区画内では出土しなかったが、いくつかの手掛かりから、西側が兵部省、東側が式部省と想定されるに至った。その根拠は、平安宮の朝堂院前面に置かれた式部省・兵部省の配置と共通すること、周辺の溝などから「式」「式曹」「兵（部）厨」「兵部」など、式部省と兵部省を示す墨書土器が出土していること、そして平安宮の兵部省で知られる片廂構造の築地塀が壬生門西側の役所でも確認されたことである。これらによって、壬生門北西側の役所が兵部省、北東側の役所が式部省と推定

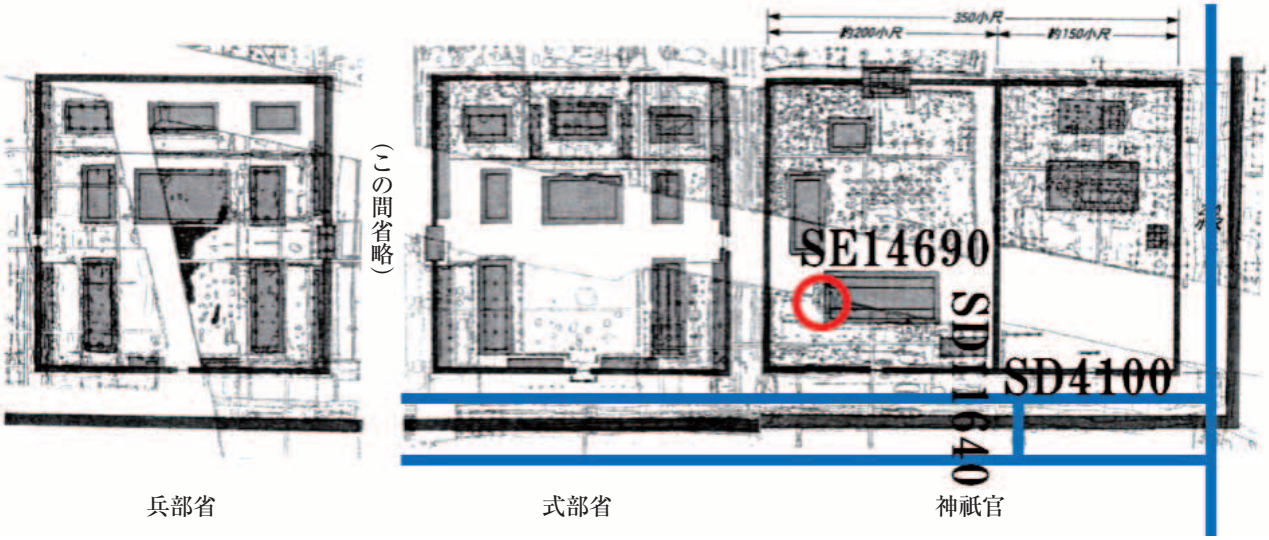

図2　東区朝堂院南方官衙の建物配置

され、1966年のSD4100の削屑の発見以来周辺に存在が想定されていながら、場所を特定できなかった式部省の位置が、初めて特定されることになった。

ところが、調査を進めると、ここに大きな課題が発生することになった。それは、壬生門内側に配置された双子の役所としての式部省・兵部省が奈良時代後半のものであり、それらは厚い整地土の上に建てられているものの、この場所には奈良時代前半の式部省・兵部省は存在しなかったことが判明したのである（双子の官衙としての式部省・兵部省の成立は745年の平城遷都後とみられているが、両省が実質的に対等の位置に置かれるようになったのは文献史料的には730年代初めのことであり、双子の官衙成立の必要条件はかなり早くから整っていたことがわかっている）。SD4100の木簡の大部分にあたる770年前後の勤務評定木簡の削屑に対応する時期の式部省の位置は明らかになったが、それよりも西で見つかったSD11640に関わる木簡に対応する時期の式部省が確認できないことになった。奈良時代前半の式部省の位置の解明は、再び振り出しに戻ったわけである。

SE14690の木簡の出土　東区朝堂院南方官衙の発掘調査はその後も継続的に行われ、奈良時代後半の式部省・兵部省とわかった役所区画の東側、すなわち最初にSD4100で勤務評定木簡の削屑が出土した場所の北側の役所の解明が進められていくことになる。その結果、平城宮内でも他に類例のないほどにダイナミックな役所の変遷が明らかになり、式部省の所在地についても解明が進むことになる。

奈良時代後半の式部省の東に展開する「式部省東役所」の解明は、まず近鉄線南側から始まった。SD4100の木簡が出土した調査区の西側、SD11640が見つかった調査区の北側に位置する場所である。平城宮の役所配置の解明に平安宮における配置（陽明文庫本と九条家本の宮城図による）が参考になることがわかってきていたから、調査を始めるにあたってまず参照したのは、平安宮におけるこの地域の役所の様相であった。平安宮では、朱雀門の北の式部省の東には式部省の厨や民部省関係の厨があり、いわば現業空間が展開している。SD4100の北側でかつて工房遺構が見つかっていたこともあり、平城宮でも宮東南隅のこの場所は、平安宮と同様の現業空間の可能性を想定して調査に入ったのであった。

神祇官西院仮説の提示　ところが、発掘調査の恐ろしさは、本当に掘ってみないと何が見つかるかわからないところにある。式部省東役所でも予想に反して、壬生門内側の式部省・兵部省で見つかったのよりもさらに規模の大きい基壇建物であった。基壇は近鉄線の線路下に潜っていくため、全体規模はわからず、また柱の位置なども確認できなかったが、これは高かった建物基壇が削られてしまったためで、かえってここに築かれていた礎石建物の規模の大きさを示していた。どう考えても厨のような現業空間とは考えがたい建物の出現にただただ驚くばかりで、この段階ではこれをどういう施設と考えるか全く成案を得ない状況だった。

全く予想もしなかった発見はその後も続くことになる。調査最終段階になって、基壇建物の下から、720

年代の木簡を含む井戸の抜き取り穴が出現したのである。つまり、基壇建物は井戸を埋めて整地したあとに建てられていたわけである。見つかった木簡は4,700点余り。内容は720年代から730年代初めにかけての役人の勤務評定の木簡の削屑で、複数の役所の勤務評定木簡を含み、SD4100の西端やSD11640とごく近い内容と時期の木簡群であった。この井戸SE14690は、式部省東役所の区画内の施設であり、そこに複数の役所に関わる勤務評定木簡が廃棄されていたということは、ここがその時期までの式部省だったことを示すものに他ならない。こうして、思わぬところから懸案だった奈良時代前半の式部省は姿を現したのだった。

こうして式部省東役所には、奈良時代前半の式部省という下層の遺構と、基壇建物をもつ上層の遺構の2つが重複して存在していることが明らかになったが、上層遺構の性格はその後どのように解明されていったのか。それには近鉄線北側の発掘調査の進展が必要だった。式部省東役所の近鉄線北側の部分は、1992年と1996年の2回に分けて調査が実施された。その結果、発掘調査成果と既往の文献史料、そして木簡を中心とする出土文字資料の総合的な検討によって役所の性格を決定できるという、稀有の成果をあげることができた。

まず、1992年の調査では、西半分の調査を行い、近鉄線北側でも基壇建物を確認した。その結果、役所の中心部分の広場を囲むように、南・西・北に3棟の基壇建物が配置されていることがわかったが、中では最初に見つかっていた南側の建物が一番規模が大きく、さらにこの役所は北門が基壇建物で、役所の構造が北を正面とする極めて特異な配置を取っていることが明らかになった。一方、奈良時代前半の式部省の井戸に対応する役所の2時期にわたる掘立柱の中心建物や倉庫の跡も確認された。

上層の役所の性格解明のポイントは、この北が正面、すなわち北向きの役所という観点であった。平安宮の役所で北が正面であることが知られているのは、全国の神社行政と宮中の神祇祭祀を担当する神祇官が唯一である。しかも、平安宮の神祇官は、東南隅ではないものの、その一つ北側の区画という比較的似かよった場所に存在する。しかしながら、役所の中から出土した資料には、それを窺わせるものはなかった。出土文字資料どころか、土器や瓦を初め遺物自体が少ないのである。

そこで、周辺に何か役所の性格を考える参考になる出土文字資料はないか。この役所の南側、南面大垣との間には、かつて13,000点の勤務評定木簡が出土したSD4100がある。この中にもしかしたら北側の役所の性格を暗示する資料が含まれていないだろうか。その結果見出したのが、「大神宮」「水主社」「鴨社籠」などと神社名が書かれた付札や、余剰分が神祇官に納められることが『延喜式』に規定されている伊勢神宮の神郡、伊勢国度会郡の庸米の荷札などの木簡であり、

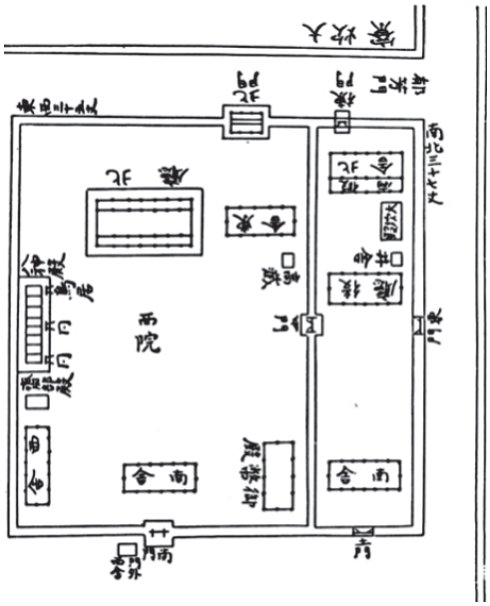

図3　平安宮の神祇官（裏松固禅『大内裏図考証』より）

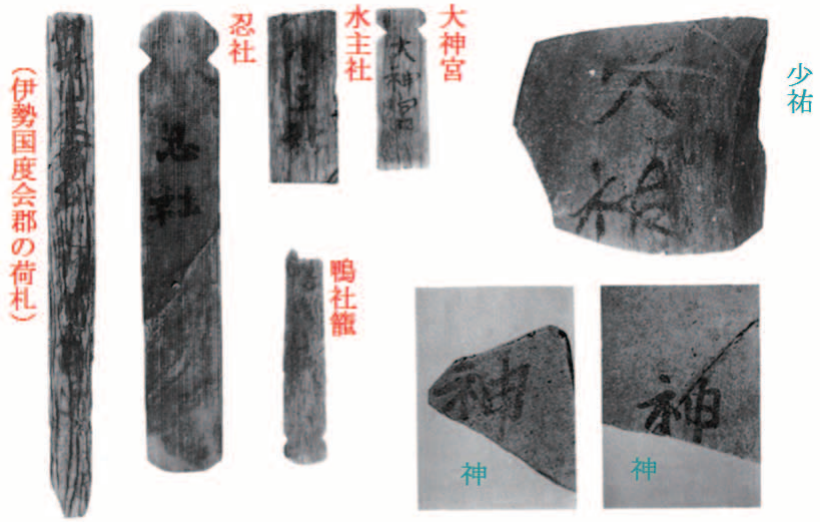

図4　SD4100出土神祇官関係文字資料

「神」「少祐」（神祇官の第三等官）と書かれた墨書土器であった。これらは式部省との関係では説明が付かない資料であり、溝の上流にも奈良時代後半の式部省しか存在しないことは明らかになっているから、北側の役所の遺物の可能性が一番高い。平安宮の神祇官は構造が知られており、広場を囲んで北・西・南の三方に建物が配置される祭祀空間の西院と、3棟の東西棟建物が南北に並ぶ実務空間の東院とが築地塀を挟んで東西に並んでいる。北側の2棟の空間には井戸がある。もしここが神祇官ならば、残された空間には平安宮の東院に似た構造の建物が存在するのではないか。

神祇官東院の発見と神祇官の確定　調査は1996年に実施され、予想通り、2棟の東西棟基壇建物を検出し、かつその間に一木刳りぬきの立派な井戸枠をもつ井戸を発見することができた。しかも、井戸枠の上部構造を抜き取った跡の土から、「兵主神社」と書かれた削屑や、神饌の目録と思われる神祇官を示す木簡が見つかり、初めて役所区画内部の資料によって、役所の性格を特定し得る資料が得られ、これまでの仮説の正しさを実証することができたのである。なお、その後、西院と東院の間が築地塀一つによって接していることも確認されている。

こうして、式部省東役所にあった奈良時代前半の式部省は、745年の平城還都後に西隣の敷地に移転し、その跡地に神祇官が移ってくるというダイナミックな役所の変遷が明らかになった。しかし、課題もある。それはこの地における神祇官の創建時期である。還都後の式部省の移転とともに神祇官が引っ越してきたのなら、SD4100の主体を占める770年前後の勤務評定木簡は上流から流れてきたか、わざわざ隣の役所である神祇官の南側に式部省から捨てに来たことになる。これはあまり考えにくい想定である。むしろ、式部省の西への移転後も跡地は式部省の実務空間として残り、それの最終廃絶がSD4100への木簡の投棄に連動するとみれば、遺物との関連を素直に理解できる。そう考えるなら、神祇官の移転は770年代前半ということになる。770年に称徳天皇が没し、仏教偏重の政策が徐々に方向転換しつつあった時期として相応しい宮内改造と思われる。この時期は、東院が楊梅宮に改造されたことが知られる。また、最近見つかった東方官衙の焼却土坑からは、造営資材とともに多量の削屑を中心とする同時期の木簡が多量に投棄されていることが明らかになっている。遺物から神祇官への建て替え年代を実証することはまだ難しいが、充分あり得る想定と考える。

東方官衙下層木簡が提起する課題　東区朝堂院南方官衙の発掘調査において、木簡を中心とする出土文字資料がどのような役割を果たしてきたかを述べてきた。敢えて調査の進行をたどる形でこの地域の解明過程を跡づけてみた。出土文字資料が単に文字資料としてだけでなく、遺構・遺跡の解明に大きな役割を果たす考古資料であることを理解していただければと考えてのことである。

結果的に、この地域の解明は一定の成功を収めているかに見える。しかし、発掘調査の進展は、さらなる課題を提起しつつある。それは奈良時代前半の式部省に関連する遺物の広がりという課題である。2010年4月、東方官衙のうち前述の焼却土坑が見つかった役所ブロックの南側で基壇建物が林立する遺構が見つかったが、その下層から、720年代の式部省に関わる木簡が出土した。部分的な調査しか行えなかったため、木簡が出土した土層の広がりやその性格が特定できないものの、常識的には奈良時代前半の式部省の存在を示唆すると理解できる遺物である。奈良時代前半の式部省の位置は、朝堂院南方の神祇官の下層で確認した役所と特定できていたはずである。今回の木簡出土地は、そこから北へ役所区画を一つ隔てた位置にあたる。SE14690の木簡が、神祇官下層の式部省の存在を実証する動かしがたい資料であることにかわりはないが、同時期の資料が南面大垣を横切るSD11640から見つかっていることも、あるいは今回の東方官衙下層からも出土したことと同様に検討すべき課題なのかも知れない。これらの解明は発掘調査の進展を待つしかない、というよりも発掘調査の進展が必ずや新たな解明の糸口を与えてくれるだろう。今やるべきことは、何が出てきても慌てないよう、これまで得られている調査成果を現段階で充分吟味しておくことである。そうすればどんな資料が出てきても見落とすことはないであろう。

神祇官関係木簡の紹介　最後に、従来読めていなかったSD4100出土木簡の中に、科学的保存処理後の再釈読によって、神祇官に関連することの明らかな資料がほかにも存在することがわかったので、既報告の木簡も含めてこの場を借りて紹介しておく（*は訂正）。

図5　新しく読めた神祇官関係資料（いずれも赤外線画像）

大神宮　67･22･3 032 CJ61 平城宮 4-4679
水主社　(72)･29･4 032 CJ60 平城宮 4-4682
忍社　190･33･3 032 CJ61 平城宮 4-4681
忍社　131･18･3 032 CJ66 平城宮 5-7847
鴨社籠　(90)･18･2 031 CJ55 平城宮 4-4680
鏡作社籠　172･24･3 032 CJ55 平城宮 4-4756*
（図5右）
弓気社　(85)･28･3 081 CJ55 平城宮 4-4793*
（図5左）
（表）枚岡籠
（裏）□□□□　(133)･18･6 039 CJ55 **（図5中）**
伊勢国度会郡継椅郷庸米四斗□□
(205)･30･3 051 CJ55 平城宮 4-4656

3. 長屋王邸の発見と出土文字資料

長屋王家木簡の発見　平城京跡左京三条二坊一・二・七・八坪、奈良時代前半の式部省の斜向かいにあたる一等地である一辺約250 mに及ぶこの宅地が、729年の長屋王の変で自刃した左大臣長屋王（遷都直後から718年までは式部省の長官〈式部卿〉）の邸宅だったことが木簡によって判明したことは、半世紀に及ぶ木簡研究史において、特筆すべき事件であった。1988年夏のことである。1961年の平城宮跡最初の発見からそれまで、平城宮跡で見つかっていた木簡は約33,000点、それ以外の藤原宮や長岡京をはじめ全国の各地の遺跡の木簡が約32,000点、総計65,000点というのが当時の木簡の数だった。そこへ、幅約3 m、長さ約27.3 m（全長がわかったのは翌年のこと）のたった一つの遺構から、35,000点に及ぶ木簡群が出現したのである。数だけからいってもいかに大きな発見だったかが知られるだろう。そればかりではない。貴族の家政機関の木簡という、それまで全く類例のない資料である点も画期的だった。日本の木簡研究史を塗り替える発見だったといっても過言ではない。長屋王家木簡の発見によって、日本の木簡研究は新しいステップへと飛躍することになった。

長屋王家木簡がもたらした情報はまことに厖大である。伝票木簡と呼ぶ食料支給の際に作られた定型の木簡を主体としながら、被支給者の多様性が長屋王家の多彩な活動を明るみに出してくれた。ここでは、その全体に言及する余裕はないので、遺跡の理解との関わりという点に絞って考えてみたい。

平城宮内の役所名の特定が難しいのと同じように、平城京内の発掘調査でいかに大規模な邸宅、立派な建物が見つかっても、大多数は住人の特定までには至らないのが普通である。その中で、長屋王邸の事例は、発掘調査成果そのものによって住人を特定できた唯一の幸運な事例である。その要因は、ひとえに木簡の発見にある。

SD4750と呼ぶ邸内の東門の内側に南北に長く掘削された溝状のゴミ穴の木簡（長屋王家木簡）が見つかる前にも、実はここが長屋王邸である可能性を示唆する木簡が出土していた。1987年の末のことである。「長屋皇宮」と書かれた、邸内の井戸SE4770から出土した3点の春米の荷札である。ところが、これらは文字の残りがたいへん悪く、赤外線テレビカメラ装置による観察でも、明確に筆画を終えないような状況で、3点揃えて比較して辛うじて「長屋皇宮」と読めるというのがせいぜいであった。しかもそれまで知られていた荷札は、貢進者の所属を記すのが一般的で、このよう

な形で宛先と思われる個人名を書いた荷札の事例は知られていなかった。「長屋皇」という特異な表記とも相俟って、これでもって長屋王の邸宅の可能性を打ち出すことを躊躇したのは充分理解できるし、宛先の書かれた荷札が、出土地の性格解明の絶対的な根拠にはならないことはこれから述べるとおりである。

長屋王邸の根拠　長屋王邸の根拠になった木簡としてよく紹介されるのは「長屋親王宮鮑大贄十編」の木簡であろう。しかし、この木簡だけでは、実は長屋王邸であることは実証できない。荷札は最終消費地で廃棄されるのが一般的で、宛先から移動することが全くあり得ないわけではないからである。例えば、長屋王家木簡には「氷高親王宮春税五斗」と書かれた備後国葦田郡葦田里の米の荷札がある。氷高（内）親王は、715年に即位して元正天皇となる女性で、長屋王の正妻吉備内親王の姉にあたる。そうした関係から長屋王邸に届けられたものとみているが、この木簡を根拠にしてこの邸宅の主を氷高内親王とみる説もあるので、もう一つの事例をあげると、長屋王家木簡には「右(大)殿」すなわち藤原不比等宛の荷札が含まれている。しかし、これを根拠にこの邸宅が不比等邸であったと論じる論者はいない。不比等邸は現在の法華寺の地であったことが明らかだからである。荷札が必ずしも宛先で捨てられるとは限らないことが理解できよう。「氷高親王」宛の荷札が氷高内親王邸の根拠にはならないのと同様に、「長屋親王宮鮑大贄十編」の存在が直ちに長屋王邸の根拠になるわけではないわけである。

もちろん、「長屋親王宮鮑大贄十編」をはじめ、3点の「長屋皇宮」の木簡が揃えば、最終消費地が長屋王邸そのものである可能性は次第に高くなっていくであろう。しかし、それを断言するためには、なお別の木簡の手助けが必要になる。長屋王邸を実証した最も重要な木簡、それは「雅楽寮移長屋王家令所」の木簡であった。差し出しと宛先の書かれた手紙の木簡は、廃棄場所から移動していないという条件が整うならば、出土地の性格を考える上で、大事な情報を提供してくれる。すなわち、AからBに充てた木簡は、宛先のB、または差し出しのAで捨てられると考えられるからである。差し出しに戻る可能性を考慮する必要があるのは、現在の手紙の常識とはやや異なるかも知れないが、いずれにせよ、出土地の性格を少なくとも二つに絞る根拠にはなり得るわけである。

「雅楽寮移長屋王家令所」の木簡の場合、差し出しは雅楽寮という役所、宛先は長屋王の家政機関の長官の家令である。この木簡の出土地は、宛先で捨てられたならば長屋王の家令のいる場所、差し出しに戻って捨てられたならば雅楽寮ということになる。出土地は京内である。雅楽寮が京内にあった徴証はなく、平城宮内に所在したとみられる以上、この木簡の出土地は、長屋王の家令の勤務地、すなわち長屋王邸の可能性を示唆する資料となることになる。この木簡1点だけでも長屋王邸の根拠足り得るわけである。そうした前提の上に、「長屋親王宮鮑大贄十編」や「長屋皇宮」木簡を傍証として、長屋王邸であることを確定したのである。もちろん、いつも差し出しや宛先の書かれた都合のよい木簡が出土するとは限らない。木簡に書かれたどんな小さな情報にも気を配り、発掘調査による遺構や遺物のさまざまな知見とともに総合的な検討を加えた上で、住人を考えていく必要がある。これは役所名の特定の場合と全く同じ手続きである。いずれにしても、そうした手続きを踏める場合の方がむしろ例外といってよい。

最近、発掘調査成果から平城遷都時に4坪占地だったことが判明した宅地の住人を、遷都時に4坪占地の宅地を班給された可能性のある人物を絞り込み、一人ずつ住所を特定していくといういわば消去法によって、舎人親王邸であるという結論を導く全く新しい手法による住人特定法が提起されている（近江俊秀「平城京における宅地班給と居住者に関する予察」奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条三坊五・十二坪』〈奈良県文化財調査報告書131〉2008年）。こうした手法がいつも応用できるわけではないけれども、住人を特定し得る新しい可能性を実証した貴重な成果と

図6　漬物進上木簡

いえるだろう。あらゆる資料を駆使して可能性を追求することが肝要である。その際出土文字資料が最も重要な役割を果たすことはいうまでもない。

木簡が明らかにする暮らしの一端　タイトルに「暮らし」の解明を掲げたけれども、実は生活実態の解明は歴史学の最も不得意とする分野であるといっても過言ではない。特に、最も生活に密着した衣食住の解明は困難をきわめる。国の編纂した歴史書『続日本紀』は五位以上の貴族の動向は伝えるが、庶民に目を配るわけではない。正倉院に伝わる1万点に及ぶ正倉院文書も、写経所というかなり特異な役所の帳簿を主体とするもので、生活実態を解明するには隔靴掻痒の感がある。これに対し、平城宮・京から見つかる木簡は、より広範囲の役所の日常業務を伝えるもので、断片的ではあるが、役所における生活実態を垣間見ることができる。勿論、木簡は断片的な記録で、いわばパーツのあちこちが欠けたジグソーパズルを組み立てるようなものである。枠組みが決まっているわけでもない。また、文字として認識できても、それが実態として何を指すのかわからない場合もある上に、ある特定の場面を切り取っているに過ぎないから、前後の過程は想像を働かせるしかない。しかし、木簡は役人たちが事務処理の過程で実際に作成した作為のない資料であり、そうしたいわば生の資料のもつ意味は大きい。その資

図7　牛乳関係の木簡
左から、牛乳持参人・牛乳煎人（長屋王家木簡）、参河国・武蔵国・上総国・美濃国の蘇貢進木簡（二条大路木簡）、江国の生蘇貢進木簡（平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑SK820出土）（左2点のみ×0.6、他は×0.8）

料をどのような文脈に中で理解するかによって、もっている意味も変わり、前述のように出土状況が全く予想もしない意味を付加する場合もある。木簡に何を語らせるかは、ひとえに利用する側の腕次第ともいえるわけである。

実態解明が困難な衣食住の中で、木簡の発見が最も大きく貢献しつつあるのは食の分野であろう。例えば、長屋王家木簡は、長屋王の所領から毎日新鮮な蔬菜類が届けられる様子を明らかにした。大根、菁、萵苣（知佐）、茄子、蕗、芹、葵、奴奈波（ジュンサイ）、古自（コリアンダー）、薊、生薑、竹子など、今と比べて遜色のない野菜類が日常的に食されていた。牛乳を邸内に運ばせたり、氷を届けさせたりという贅沢な暮らしぶりも木簡が初めて明らかにした。漬物の存在も特筆される。粕漬けの毛瓜（冬瓜）と韓茄子、醤漬の毛瓜と茗荷を長屋王邸に届けた木簡（図6）の発見は、奈良漬けのルーツとして注目される。「山寺麦縄価」と記す木簡は、日本における麺類の起源を考える大事な資料である。また、鹿肉のさまざまな部位（頚宍・上蘇宍・下蘇宍・骨宍・屋方骨・骨覆・位宍）を記し、鹿の解体作業が行われていた可能性を示す木簡も、考えられてきた以上に獣肉が食されていたことを予測させる。

一方、光明皇后の皇后宮に関わる二条大路木簡も、豊かな食材の宝庫という点では長屋王家木簡に勝るとも劣らない資料群である。牛乳を煮詰めて作る蘇という高級食材の貢進木簡は、これまで内裏北外郭の土坑SK820で見つかった近江国からの1点しかなかった。それが二条大路木簡で一挙に4点（美濃国、参河国・武蔵国・上総国）も見つかり（図7）、『延喜式』に規定のある年交替の全国からの貢進制度が奈良時代に遡ることを明らかにした。（干）柿・梨などの果実や、鮭・昆布など全国の山海の珍味にも事欠かない。果実については、種子の形で実物の確認できるものもある。栗の皮や胡桃の殻なども豊富に出土する。

残念なのは、これらの食材の調理方法、レシピを伝える木簡がないことである。文字資料だけでなく、遺物の総合的な検討から考えていくのが王道だが、将来献立やレシピの書かれた木簡が出土しないとも限らない。

木簡を初めとする出土文字資料に何をどのように語らせるか、事例を積み重ねていくことが大切である。類例の増加が読めなかった文字を読めるようにするのと同様に、事例の積み重ねが出土文字資料全体の真の価値を明らかにし、ひいては遺跡自体の真の意義付けを明らかにする。平城宮・京は、そのような無限の可能性を秘めた木簡の宝庫なのである。

漢魏洛陽城の北魏宮城中枢南部の共同調査

中国社会科学院考古研究所 研究員　**銭　国祥**

中国社会科学院考古研究所と日本・奈良文化財研究所は、2007年～2011年にかけて漢魏洛陽城の北魏宮城中枢南部の考古学調査を共同で行った。調査と研究により、北魏宮城中枢南部の中軸線上の主要建物の形態、規模、空間的配置などが明らかになり、古代都城の形態変化の研究を進める上での重要な基礎資料を得た。

一．漢魏洛陽城の歴史とこれまでの調査

洛陽は中国で最も重要な古都の1つである。洛陽の位置する伊洛河盆地は平坦な地形で、伊河、洛河、瀍河、澗河が盆地を縦断し、自然環境に恵まれている。中国古代の夏、商、西周、東周、後漢、曹魏、西晋、北魏、隋、唐、後梁、後唐、後晋、北宋などの王朝がここに都や副都を置くなど、その歴史は古く、古跡も数多い。盆地内の東西約30キロメートルに及ぶ洛河沿岸、すなわち洛河の旧河道北岸、邙山の南側には、二里頭の夏王朝都邑遺跡、偃師商城遺跡、東周王城遺跡、漢魏洛陽城遺跡、隋唐の東都・宋の西京洛陽城遺跡といった重要な都城遺跡が5つ残されている。

漢魏洛陽城遺跡は5つの遺跡のちょうど中間に位置し、城址は周代から建設が始まり、唐代初期まで約1600年間にわたり使用された。東周、後漢、曹魏、西晋、北魏などの王朝がここを王都または国都とし、都城として使用された期間は600年の長きに及ぶ。面積は北魏時代が最大で、100平方キロメートル近くに達した。その都市建築の歴史と形態や配置の変遷は、

銭　国祥(Qian Guo Xiang)(せん・こくしょう)
洛陽工作站長、洛陽漢魏城隊隊長、中国社会科学院考古研究所研究員、
中国社会科学院研究生院教授、修士研究生指導師
1961年　河南省洛陽市生まれ
1983年　吉林大学歴史学部考古学専攻卒業
1983年　中国社会科学院考古研究所入所
1993年　漢魏洛陽城隊隊長
2004年　中国社会科学院研究生院教授、修士研究生指導師
2007年　洛陽工作站長を兼務
現在の専門分野は、考古学、漢～唐代の都市、墓葬、瓦、仏像の研究。

2008年から2011年にかけて中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所は共同で、北魏洛陽宮城中枢南部の発掘調査と研究を実施しました。これまで、宮城正門の閶闔門以北に位置する２号門、３号門と宮城西南部５号遺跡の発掘調査を実施しました。これらの調査をとおして、閶闔門以北、太極殿以南の地区における主要建物の配置、建物の形態や時期などをあきらかにしました。この一連の調査は漢魏洛陽城の変遷を研究する上で重要な進展をもたらすとともに、中国から東アジアの古代都城研究においても多大な意義をもつものと考えています。

中国古代の都城発展史においてきわめて重要で、後代の都市の多くがこれを模範とした。

漢魏洛陽城遺跡は、現在の洛陽市の約15キロメートル東にある伊洛河盆地の中ほど北寄りに位置する。洛陽市の洛竜区に属し、偃師市と孟津県の交わる場所にあたる。1961年に中国国務院により第一弾の全国重点文物保護単位に指定され、1962年に中国科学院考古研究所（現在の中国社会科学院考古研究所）が調査隊を派遣して発掘を開始した。調査はすでに50年に及び、多くの成果をあげている。たとえば1960年代初めには北魏内城の全面的調査および重点的発掘が行われ①、この城址の基本的配置とその意義が明らかになった。1970～80年代はじめには、南の郊外の霊台、明堂、辟雍、太学などの礼制建築遺跡および北魏内城の永寧寺の塔基壇の発掘が行われた。1980～90年代はじめには、北魏内城の城壁、外郭の城壁、道路、水路、金墉城の城壁などを発掘調査した。21世紀に入ってからは主に北魏宮城遺跡の発掘を実施した。このうち1999～2000年にかけては、北魏宮城の城壁に試掘坑14本を設定し、宮城壁の構造や時代について重要な手がかりを得た。2001～2002年には北魏宮城の閶闔門の全面発掘を実施し②、門楼と門前の双闕基壇の平面形態と構造を知ることができた。発掘によって、この門遺構は城門楼基壇、門楼両側の中庭、門楼前左右の双闕および双闕と連なる両側の宮城壁から構成されることが分かった。城門楼の基壇は東西に44.5メートル、南北は24.4メートルあり、前後にそれぞれ3本の斜道を有する。基壇には40本の柱穴からなる殿堂式城門楼の柱の配置、さらに東西2つの基台と中間に2つの隔壁およびその間の3本の通路（門

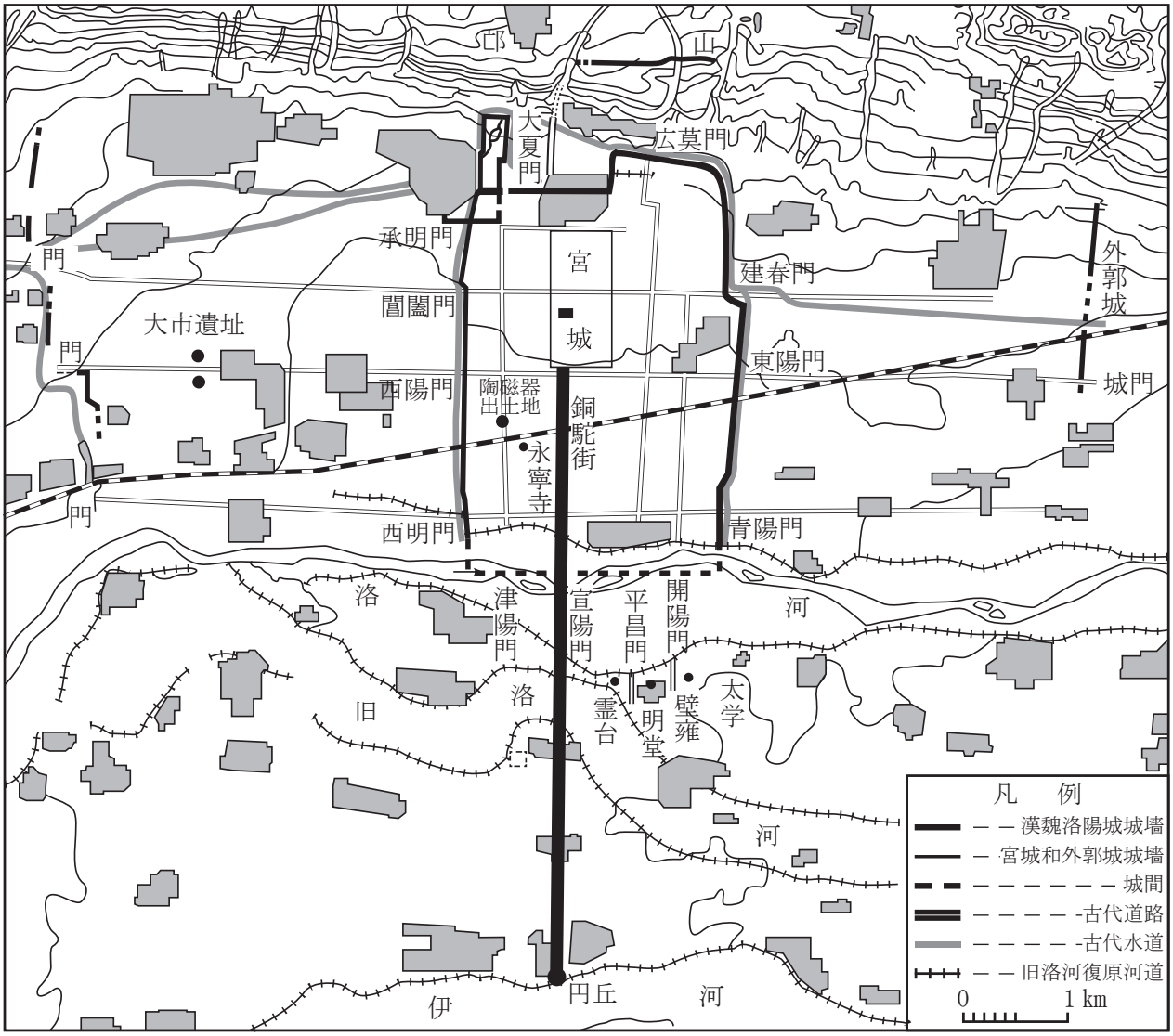

図1　北魏洛陽城

道）の遺跡が残されている。

門前左右の双闕は対称に配置され、その間隔は41.5メートル、闕基壇の長さは約29メートルで、闕の平面は1つの母闕が2つの子闕を有する曲尺状の子母闕形式をしている。発掘調査の結果、この宮城の門闕の造営時期および基本的な平面配置が形成されたのは魏晋時代であることが明らかとなったが、これは魏晋時代の宮城の形態を確定する上できわめて重要である。その殿堂式城門楼と門前の巨大な版築の双闕の形態や構造はきわめて独特で、中国古代都城の門闕の発展過程における重要な空白を埋め、この宮城遺跡についてさらなる考古学的調査を行うための基礎固めともなった。

二．北魏宮城中枢南部の発掘調査

2007年、中国社会科学院考古研究所と日本奈良文化財研究所は、漢魏洛陽城北魏宮城遺跡の共同調査研究プロジェクトに着手し、事前申告および準備業務を行った。中国側は国の大型遺跡保護事業に協力し、宮城の閶闔門を再発掘した。閶闔門の保護展示工事を行ったほか、宮城南部において宮城2号門および付近の道路や水路の発見など重要な手がかりを得た。

2008年4～6月、10～12月、共同調査が正式にスタートし、北魏宮城2号門の発掘調査が行われた。発掘面積は2500平方メートルである。2009年4～7月、10～12月、2010年3～6月には、引き続き北魏宮城3号門に対する発掘を行った。発掘面積は2800平方メートルである。2010年10～12月、2011年3～11月には北魏宮城南西隅および城壁の発掘調査を行った。発掘面積は2080平方メートルであった。

1．宮城2号門の発掘

宮城2号門は北魏宮城閶闔門の真北95メートルに位置する。発掘により、この門は双闕がない以外は、形態や規模などいずれも閶闔門と基本的に一致しており、北魏時代の3つの通路（門道）を有する殿堂式の門であることが明らかになった[③]。版築基礎は東西の長さ44.5メートル、南北の幅24メートルで版築土は黄褐色である。基壇の表面には、形態や規模が閶闔門の基壇上の2つの基台、および2つの隔壁と一致する赤褐色の塊状版築遺構が残っており、その間には3本の通路（門道）がある。基壇の南側と北側にもそれぞれ3本の斜道があり、東西には付属建物が取りつく。付属建物の版築基礎と門の基礎は一体となり、南北の奥行きは門の基壇よりやや短く約16メートルである。門基壇の南北両端より、それぞれ5メートルと3メートル内側に入る。付属建物の保存状態はわるく、具体的な形態や構造は明らかになっていない。分析により、この門は魏晋時代に造営され、北魏時代に修築し、北朝後期に一部改築されたことが分かった。

2号門の前後では、南北方向および東西方向の御道と溝の遺構が発見された。東西方向の道路は、それぞれ門の南23メートルと北40メートルの地点に位置し、調査により東西の長さはいずれも100メートルを超え、南北の幅は約10メートルであることが分かった。いずれも上下二層の路面が見つかっており、上層は北魏時代以前、下層は魏晋時代ごろのものである。二層の路面には轍の跡が数本残されており、轍の間隔は約1.2メートルだった。南北方向の道路は磚敷きで、門基壇の南北両側にある中央の斜道と通路につながる。道路の幅は7.9～8.1メートル、時代は北魏以前である。この道路は、閶闔門北側で発見された磚敷き道路と方向や幅、構造が一致していることから、宮城の閶闔門、2号門、および北側の3号門を結ぶ幹線道路であったと推測される。溝は、それぞれ門の南側と北側にある

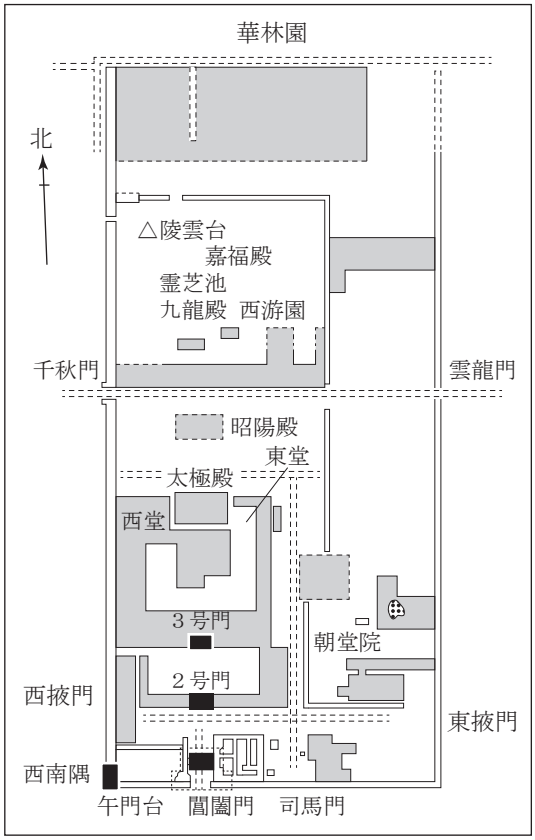

図2　洛陽宮城内の基壇と共同調査の発掘区

東西方向の道路の側溝であり、道路とほぼ平行に走っている。層位および出土遺物から、時代は魏晋から北魏ごろと見られる。

この門は、正門である閶闔門の真北に位置し、北側は太極殿の可能性が高い宮城内最大の基壇に正対しており、北魏宮城の軸線上における第二の重要な建物であることは明らかである。関連する文献の記載から、閶闔門の内側、太極殿前面の止車門である可能性がきわめて高い[④]。

2. 宮城３号門の発掘

宮城３号門は２号門の真北約80メートル、太極殿の真南約300メートルの地点に位置する大型の殿堂建築であり、両側には回廊がとりつく。北魏宮城の正殿である太極殿の内庭南端の中央に位置していることから、太極殿建物群の南端における最も重要な建物であることがわかる。調査によると、この基礎の時期はやや複雑で、形態や構造に顕著な変化が見られる。

３号門の前期の基礎は、魏晋から北魏ごろにかけてのものである。基礎は損傷が激しく、残されているのはすべて地下の基礎部分である。北部は中期の大型版築基礎によって破壊されており、残存する基礎の南部は東西の長さ約40メートル、南北の幅10メートルである。基礎には6つの赤褐色の塊状の版築遺跡が残されており、真ん中の4つは約2.3×3.6メートル、両端の2つは約8×4.2メートルである。真ん中の4つの版築にはすべて礎石が置かれていた。残存した遺跡を復元したところ、前期の基礎の規模や形態、構造は、閶闔門および2号門に相似する可能性がある。中期のものは、初期の基礎を壊して北部に造営した大規模な版築遺跡で、地下の地業のみが残っている。中間の主体部分は東西の長さ約55メートル、南北の幅約45メートルで、版築の厚さは1.2～3メートルである。この基礎の版築は表面が平滑で、建物の跡が残っていないことから、後期はおそらく地面として使用されたと思われる。中期の基礎には、北魏時代の光沢のある瓦の破片が大量に含まれており、造営時期は北魏後期以降と思われる。後期は、残存する前期の基礎の南半分に柱が配置された跡があり、建物を構成していた。時代は北朝の後期（北周時代）ごろである。主体部分の版築基礎は東西に細長く、東西の長さは約40メートル、南北の幅は約10メートルである。基礎には東西に14列、南北に2～4列の柱穴からなる柱の配置跡が残っており、東西13間、南北1～3間の大型殿堂式建物であったことを示している。

建物基礎の東西両側には、いずれも付属建物の基礎がとりつく。両側の版築基礎の形態や規模は基本的に一致している。北部は中期の版築基礎によって破壊されており、残存する基礎は東西に細長く、版築は黄褐色、造営時期は魏晋から北魏時代のころである。東側に残存する基礎の長さは30メートル、西側に残存する基礎は25メートルで、南北の幅は約10メートルである。ボーリング調査により、東西の基礎の両端はどちらも外に向かってつづいていることが分かった。両側の版築基礎では、規則正しく並んだ赤褐色の帯状および方形の塊状版築遺構が見つかっており、黄褐色の版築からなる版築基壇に浅い溝を掘り、突き固めて作られている。帯状の版築の遺跡は東西に伸びており、いずれも両側の版築基礎の北部に位置し、幅は1～2メートルである。方形の版築遺構も東西方向に伸びており、帯状版築の南側に平行に並んでいる。両側の基礎上にそれぞれ少なくとも4基残存しており、ほとんどが1.5～2メートル四方で、中心間距離は約4.3メートルである。残存する状況から、帯状の版築は版築塀の基礎で、方形の塊状版築は柱の礎石を据えるための基礎と判断される。これらの遺跡が付属建物の配置と関係していることは明らかで、版築塀と柱を有する大型の廊状建物であったと推測される。

3. 宮城南西隅の発掘

北魏宮城南西隅は、宮城閶闔門の西側約140メートル地点にあり、10×10メートルのグリッドを18個設定した。発掘により北魏宮城の西城壁、南城壁および南西角の基礎および宮城壁両側の排水溝、後期の住居跡、かまど跡などが見つかった。

発掘された北魏宮城西城壁は南北51.5メートル、幅2.2～4メートルが残存しており、南城壁は東西に19メートル、幅4～5.8メートル残存している。攪乱や破損が激しく、地上部分の壁体および城壁内の地面はいずれも残っていないが、城壁外側の地面はやや低く保存状態も良い。宮城壁の外側は高低差0.3～0.7メートルのスロープ状になっていた。この宮城西城壁と南城壁の基礎は、北周時代に改修されている。

北魏宮城南西角の基礎は、宮城南城壁と西城壁の接合地点にあり、平面上、宮城の壁はここでL字型を呈している。版築の規模は、南城壁、西城壁ともに時

代ごとに補強されており、版築の基礎を最大で3～3.5メートルの厚みにしているほか、平面上では、南城壁、西城壁ともにいくぶん両側に拡張している。北魏時代の版築基礎の南北の長さは9メートル、東西の幅は14.5メートルで、南壁と西壁の接合地点の幅は7.5メートルである。北周時代に版築基礎の規模は少し拡大され、南北の長さは16メートルとなっている。このような状況は、宮城南西角に当時重要な建物が置かれていたことを示している。

宮城南西角の内側では、給排水施設も発見された。主に大型の磚積みの池と磚積みの水路4本で、時代はいずれも北魏以前である。磚積みの池の平面形はほぼ長方形であり、残存部分の東西の長さは5.5メートル、南北の幅は9.3メートル、深さは1.4メートルである。池を埋めた土は、縄目模様の瓦片を大量に含んだ灰色の水分を含む土で、池の底は硬く、磚を敷いた痕跡が見られた。磚積みの水路はいずれも暗渠で、宮城西城壁の内側に沿うように南北に走る2本の水路があり、間隔は3メートルである。南端は池の北側から出ており、残存する長さは約27メートル、水はいずれも南から北に流れる。水路の幅は約1.4メートル、水路内側の幅は約0.5メートル、両側の磚積み壁は0.4メートルほど残存する。池の北西部にはL字型の水路が1本あり、南北に走る水路の残存する長さは6.5メートル、東西に走る水路の長さは18メートルで、宮城西壁の下を西向きに貫き、南北に走る大型の磚積み暗渠に合流する。宮城の南城壁内側のごく近い位置にも東西に流れる水路が1本ある。

宮城西城壁の両側では、北魏時代以降のかまど跡および住居跡も発見されている。かまど跡は宮城西城壁の内側にあり、宮城壁から東へ5.5メートル地点に位置する。かまど跡は6基あり、南北に整列していた。かまどの平面形状は楕円形で、東西の長さは約3.6メートル、南北の幅は約2.3メートル、残存する高さは0.6メートルである。調査により、これらのかまどは北朝後期まで使用していたと考えられる。住居跡は宮城西城壁の外側にあり、その範囲は南北30メートル、東西15メートルにおよぶ。遺跡の保存状態は悪く、残存する磚積みは、いずれも幅約0.4メートル、高さ約0.2メートルの壁の基礎である。建物は密集して並び、配置はやや雑然としている。建物内の遺物は多くはないが、北斉時代の「常平五銖」と北周時代の「五行大布」貨幣が一緒に束ねられたさし銭が発見されている。層位と出土遺物から見て、これらの建物は北周時代の遺跡と考えられる。

4. 宮城西壁の断割調査

宮城南西角の北80メートル地点に、宮城西城壁を横に貫く70×4メートルの調査区を設けた。北魏、北周時代の宮城西城壁、および宮城壁外側の漢晋時代の大型水路、北魏時代の排水暗渠、北魏および北周時代の路面などが見つかった。

前期の宮城壁の版築は、北魏宮城西城壁の内側にある。時代は魏晋以前で、連続する2つの単位からなる。版築は黄褐色で、全幅は8.3メートル、外側の厚みは3.7メートル、内側の厚みは1.5メートルである。版築西側の縁部には、磚積みの壁が取り壊された後の溝の痕跡が残っている。溝の幅は0.6メートル、深さは約3メートルで、磚の痕跡から、積まれた磚は46×23×11センチメートルの大型の磚であったことが分かる。城壁内側の地面は残存しておらず、当時の城内の地面はやや高く、後期の遺跡に破壊されたと推測される。城壁の外側には幅約4メートルの斜面があり、これが城壁外の地面である。このことから、魏晋時代の宮城内側の地面は外側より約3.5メートル高く、当時は地勢に沿って、高地の周りを囲むように版築や磚積みで宮城壁を築造していたと推測される。魏晋時代の宮城壁の西側では、南北に走る漢晋時代の大型水路が発見されている。東岸は宮城壁外側の磚積みの溝から4.2メートル離れている。水路は地山土に掘られたもので、上部の幅は29メートル、底の幅は20.4メートル、水は北から南に流れる。水路底部の版築には、玉石や瓦片が大量に混じった黄褐色の硬い面が含まれる。水路内には灰褐色の堆積土が3メートル近くあり、複数の時代をまたいで堆積していることから、長期にわたって使用されたことが分かる。水路の堆積土の上には、魏晋時代から北朝時代にかけての瓦片や堆積土、道路の土などが何層にも積み重なっている。

北魏時代の宮城西城壁は、魏晋時代の宮城の壁の外側1.7～2メートルの地点に位置し、版築は灰褐色である。基礎は漢晋時代の水路の堆積土の中に掘られており、底部は水路底部の瓦片の硬い面にまで達している。基礎の版築の上層は比較的広く、東西の幅7.4メートル、厚さ2.2メートルである。下層はやや狭く、東西の幅1.9～2.5メートル、厚さ1.8メートルである。

地上の壁体の版築は、残存する高さが0.5メートルで、東西の幅は5.8メートルである。宮城壁の外側には、保存状態が比較的良好な北魏時代の路面があり、残存する東西の長さは11～15メートル、厚さ0.1～0.25メートルである。路面は東高西低の緩やかなスロープ状を呈し、部分的に玉石が敷かれている。北魏の宮城壁の西2.7メートル地点の路面下では、北魏時代の大型の磚積み暗渠も発見されており、水は北から南に流れる。その基礎も漢晋時代の水路の堆積土の中に掘られており、断面は逆台形を呈し、上部の開口の幅は3.8メートル、底部の幅は3.5メートルである。上部の埋土は突き固められており、その厚さは0.1～0.2メートルである。基礎内の磚積み暗渠の内側の幅は1.4メートル、高さは約1.3メートルで、頂部は二層のアーチになっている。

北魏時代の宮城壁の版築の上には、北周時代の城壁の基礎もある。東西の幅は1.8～3.8メートル、残存部分の厚さは0.4～0.7メートルで、北魏時代の宮城の壁の基礎の上に築造または改築したものである。この北周の宮城壁の外側にも、北周時代の路面があり、残存する東西の幅は9メートル、厚さは0.1～0.2メートルである。

三. 発掘調査の主な成果

1. 漢魏洛陽城の北魏宮城中枢南部の発掘調査によって、宮城正門の閶闔門、2号門、3号門および宮城南西角の位置を確定した。これにより、今後この宮城の歴代の建物配置を復原する上での重要な手がかりが得られた。これらは明確な政治的意義を有する建物であり、他の都城や宮城の建物を発掘する際の基準になるだろう。

2. 北魏宮城中枢南部の3つの主要建物の発掘により、その規模や大きさ、形態や構造および空間的配置についての認識が深まった。これらはいずれも宮城の軸線上に整然と並んでいることから、太極殿南方の重要な建物であることは明らかである。調査した遺跡の状態から、設計・配置に共通性があるだけでなく、場所の違いにより建物の形態・構造に差異があることが分かった。このことは、漢魏時代の宮城の研究にとってきわめて重要であり、調査・研究と保護・展示を行うにあたり、重要な基礎資料となるだろう。

3. 北魏宮城南西隅および宮城壁基礎の調査は、北魏宮城の範囲および時代による変遷を明確にする上できわめて重要である。まず、北魏宮城の範囲、とくに西の境界を明らかにした。つぎに、土層の断面は各時代の宮城壁の造営や改築を示し、宮城の創建は魏晋時代以前であり、北魏および北周時代にも継続して使用され、その範囲と構造は大きく変わらなかったことを明らかにした。また、宮城西城壁外側で発見された漢晋時代の大型水路は、『水経注』などの文献に記載されている漢魏時代の「陽渠」であると考えてはほぼ間違いないだろう。このことは、漢魏洛陽城の都市の構造や河や水路の構成や変遷を研究する上で、重要な意義を持つ。

4. 考古学的調査により、北魏宮城の閶闔門、2号門、3号門および宮城壁などの基礎はいずれも曹魏時代に創建されたことが確定された。このことから漢魏洛陽城は曹魏時代から単一の宮城を北側中央に置き、宮城の正殿を太極殿と称し、宮殿前方に軸線に沿って大通りを設置するという配置を採用していたことも確認できた。こうした都城形態の配置はきわめて重要で、中国の古代都城における漢代以前の「面朝後市」の形態から、「建中立極」という新たな形態への変化に大きな影響を及ぼした。この後に続く北魏宮城が、魏晋宮城の基礎の上に造営し使用しただけでなく、後世の隋の大興城と唐の長安城、隋唐の東都である洛陽城、北宋の東京城、元の大都と明清の北京城もこの新たな形態から発展している。日本の平城京は、隋の大興城と唐の長安城の形態や配置を踏襲しているが、平城京や藤原京など日本の都城の配置も前述の新たな形態にその起源を見出すことができる。

5. 発掘で出土した層位にともなう大量の遺物は、漢魏洛陽城の出土遺物の編年を進める上で大きな役割を果たした。 結論として、これらの発掘調査は、漢魏洛陽の都城形態の変遷の研究に重要な意義を有するだけでなく、中国ひいては東アジアの古代都城の研究にとっても重要な成果となるであろう。

注　釈：

① 中国科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城初歩勘査」『考古』1973年第4期。

② 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽

漢魏故城北魏宮城閶闔門遺址」『考古』2003年第7期。

③ 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所連聯合考古隊「河南洛陽市漢魏故城新発現北魏宮城二号建築遺址」『考古』2009年第5期。

④『魏書・郭祚伝』：（世宗）下詔、御在太極，騶唱至止車門，御在朝堂，至司馬門。

汉魏洛阳故城北魏宫城中枢区南部的合作勘察

中国社会科学院考古研究所　钱国祥

2007 年～2011 年，中国社会科学院考古研究所与日本奈良文化财研究所合作，对汉魏洛阳故城北魏宫城中枢区南部进行了考古勘察。通过考察研究，对北魏宫城中枢区南部中轴线上主要建筑的形制、规模和空间布局有所了解，为进一步研究古代都城的形制演进提供了重要基础资料。

一、汉魏洛阳故城的历史与以往考察概况

洛阳是中国最重要的古都之一，其所在的伊洛河盆地地势平坦，伊、洛、瀍、涧四条河流纵贯整个盆地，自然环境优越。中国古代夏、商、西周、东周、东汉、曹魏、西晋、北魏、隋、唐、后梁、后唐、后晋、北宋等朝代先后在此作为都城或陪都，历史悠久，古迹众多。在盆地内东西约30 公里的洛河沿岸，即古洛河之阳、邙山之南，保存有五座重要的都城遗址，即二里头夏代都邑遗址、偃师商城遗址、东周王城遗址、汉魏洛阳故城遗址、隋唐东都及宋西京洛阳城遗址。

汉魏洛阳故城遗址正处在五座都城遗址中间，城址自周代始建，一直沿用到唐初，其间延续使用约一千六百年。东周、东汉、曹魏、西晋和北魏等朝代先后曾做为王都或国都，累计都城时间长达600 年。城址面积最大时是北魏时期，面积近100 平方公里。它的城市建筑历史与形制布局沿革变化，在中国古代都城发展史上极为重要，多为后世城市建设所遵循。

汉魏洛阳故城遗址位于今洛阳市区以东约15 公里的伊洛河盆地中部偏北，为洛阳市下辖洛龙区、偃师市和孟津县相交汇的区域。该城1961 年被中国国务院公布为第一批全国重点文物保护单位，1962 年中国科学院考古研究所（今中国社会科学院考古研究所）即开始派队考察发掘，至今已经工作50 年，取得了许多重要考古发现。如20 世纪60 年代初期，对北魏内城全面勘探和重点发掘①，了解该城址的基本布局和内涵。20 世纪70～80 年代初，对南郊灵台、明堂、辟雍和太学等礼制建筑遗址和北魏内城永宁寺塔基发掘。20 世纪80～90 年代初，对北魏内城墙垣、外郭城墙垣和道路水系、金墉城墙垣等勘探发掘。进入21 世纪，主要对北魏宫城遗址勘察发掘。其中1999～2000 年，在北魏宫城墙垣上试掘探沟14 条，获得有关宫墙建筑结构和时代的重要线索。2001～2002 年，对北魏宫城閶闔门遗址全面发掘②，获得该城门楼和门前双阙基址较为完整的建筑平面形制和结构。发掘显示，该门址由城门楼基座、门楼两侧院落、门楼前左右双阙以及与双阙连接的两侧宫墙等组成。城门楼台基东西44.5 米，南北24.4 米，前后各有3 个坡道。台基上残存40 个柱础（坑）组成的殿堂式城门楼柱网，还有东西2 个墩台和中间2 个隔间墙以及之间的3 个门道遗迹。门前左右双阙对称分布，间隔41.5 米，单个阙台长宽约29 米，阙体平面皆为1 个母阙带2 个子阙的曲尺形子母阙式。发掘解剖还确定，这座宫城门阙的始建和基本平面布置皆形成于魏晋时期，这对于确定该城魏晋时期的宫城形制极为重要。其殿堂式城门楼和门前巨大夯土双阙建筑形制和结构都极为独特，填补了中国古代都城门阙建筑发展过程中的重要缺环，同时为该宫城遗址进一步考古勘察奠定了坚实基础。

二、中日合作对北魏宫城中枢区南部的勘察

2007 年，中国社会科学院考古研究所与日本奈良文化财研究所合作，开始对汉魏洛阳故城北魏宫城遗址考察研究项目进行前期申报和相关准备工作。其中，中方在配合国家大遗址保护工作中，再一次发掘了宫城閶闔门遗址。除配合完成閶闔门遗址保护展示工程外，在宫城南部区域还获得一些新的重要线索，包括宫城

二号门址及附近道路与河渠遗迹的发现等。

2008 年4～6 月、10～12 月，合作勘察正式启动，对北魏宫城二号门址考古发掘，发掘面积2500 平方米。2009 年4～7 月、10～12 月、2010 年3～6 月，继续对北魏宫城三号门址发掘，发掘面积2800 平方米。2010 年10～12 月、2011年3～11 月，又对北魏宫城西南隅及墙垣勘察发掘，发掘面积2080 平方米。

1、宫城二号门址的发掘：

宫城二号门址位于北魏宫城阊阖门正北 95 米处。发掘显示，这座门址除不设双阙外，其形制结构和规模尺度均与宫城阊阖门遗址基本一致，也是一座北魏时期的三门道殿堂式宫门建筑③。夯土基址东西长44.5米，南北宽24 米，夯土黄褐色。台基表面残存有和阊阖门台基上两个墩台、两个隔间墙形制规模相一致的红褐色块状夯土遗迹，之间显然为三个门道。在台基南、北两面也各有三个慢道，东西两侧则接有附属建筑遗迹。附属建筑的夯土基址与门址连为一体，南北进深略小于门址台基，南北宽约16 米，在门址台基南北两侧分别内收5 米和3米。此附属建筑遗迹保存较差，具体形制结构尚不明确。据解剖，该门址最早始建于魏晋时期，北魏时期重修沿用，北朝晚期略有改造。

在二号宫门前后，均发现有南北向和东西向的御道及沟渠遗迹。东西向道路遗迹分别位于门址南侧23 米和北侧40 米处，据勘探东西长度皆超过100 米，南北宽约10 米。均发现有上下两层路面，上层时代不晚于北魏时期，下层约为魏晋时期。两层路面上均发现有数条车辙痕迹，车辙间距约1.2 米。南北向道路为包砖道路，分别直对门址台基南北两侧的中间慢道及中门道，宽7.9～8.1 米，时代不晚于北魏时期。此道路遗迹和以往在阊阖门北侧发现的包砖道路，走向、宽度和结构完全一致，由此推测应是连接宫城阊阖门、二号宫门和北侧三号宫门的主干道路。沟渠遗迹分别位于门址南侧和北侧东西向道路旁，走向与道路大致平行，根据地层与出土遗物，时代约为魏晋至北魏时期。

该门址位于宫城正门阊阖门正北，北面又直对可能是太极殿的宫城内最大殿址，显然是北魏宫城主要建筑轴线上的第二座重要屏障性建筑。根据有关文献记载，极有可能就是宫城阊阖门内侧、太极殿前的止车门基址④。

2、宫城三号门址的发掘：

宫城三号门址位于二号宫门正北约 80 米、太极殿正南约300 米处，也是一座大型夯土殿堂建筑，其两侧连接有附属的廊庑建筑。由于其正处在北魏宫城中心殿址——太极殿建筑院落正南端正中的位置，显然是太极殿建筑群南端的最重要屏障建筑。据勘察，该基址建筑时代较为复杂，不同时期在建筑形制和结构上具有明显不同的变化。

三号宫门的早期建筑基址，时代约为魏晋至北魏时期。基址被破坏严重，残存遗迹均为地下基础。由于北部被中期的大型夯土基址破坏，残余的基址南部东西长约40 米、南北残宽10 米。基址上残存有6 块红褐色块状夯土遗迹，中间4块约2.3×3.6 米，两侧2 块约8×4.2米，中间4 块夯土内均还安置有承础石。据残存遗迹复原，早期基址的规模和形制结构，可能与阊阖门和二号宫门相似。中期是打破早期基址北部重筑的更大规模夯土基址，仅存地下基础，中间主体部分东西长约55米，南北宽约45 米，夯土厚1.2～3 米。该基址夯土表面平整，未见任何建筑遗迹，表明晚期可能被作为地面使用过。由于中期夯土中包含大量北魏时期光面瓦片，建筑时代约为北魏晚期或以后。晚期是在早期残存的南半部基址上布置柱网，构成屏障性建筑，时代约为北朝晚期（北周）。主体部分夯土基址为东西长条形，东西长约40 米，南北宽约10 米。基址上残存有东西14 排、南北2 至4 列柱坑组成的柱网，显示其是一座面阔13 间、进深1～3 间的大型殿堂式建筑。

在主体建筑基址的东、西两侧，均连接有附属建筑基址。两侧的夯土基址形制和规模基本一致，北部均被中期的夯土基址破坏，残存基址为东西长条状，夯土为黄褐色，建筑时代约为魏晋至北魏时期。东侧基址残长30 米，西侧基址残长25 米，南北残宽约10 米。据钻探，东侧和西侧基址两端均继续向外延伸。在两侧夯土基址上，均发现有规律分布的红褐色条状和方形块状夯土遗迹，系在黄褐色夯土筑成的夯土台基上开挖浅槽夯筑而成。条状夯土遗迹东西向，均位于两侧夯土基址北部，宽1～2 米；方形夯土遗迹也各呈东西向平行排列于条状夯土南侧，两侧基址上各残存不少于4 个，多数为1.5～2 米见方，中心间距约4.3米。据残存遗迹判断，条状夯土可能是夯土隔墙的基槽遗迹，方形块状夯土则是放置柱础的夯土基槽遗迹。这些遗迹显然与附属建筑的布局有关，推测其应为有夯土墙和大型檐柱的大型廊房建筑。

3、宫城西南隅遗址的发掘：

北魏宫城西南隅位于宫城阊阖门遗址西面约 140 米处，布设10×10 米探方18 个。发掘清理了北魏宫城的

西墙、南墙和西南角基址，以及宫墙两侧的排水沟渠和晚期房基、灶坑等遗迹。

发掘的北魏宫城西墙南北残长 51.5 米，残宽2.2～4米；南墙东西残长19米，残宽4～5.8 米。因扰乱破坏严重，地上部分墙体和墙内地面均已无存，但由于宫墙外侧的地面较低且保存较好，宫墙外侧呈斜坡状，高差0.3～0.7 米。该宫城西墙和南墙基址之上，北周时期均有所改造和修筑。

北魏宫城西南角基址位于宫城南墙和西墙交汇处，平面上宫墙在此呈“L”形。夯筑规模在不同时期均较南墙和西墙有所加强，除了夯土基础深厚，最厚达3～3.5 米，在平面上均还较南墙和西墙略向两侧加宽。其中北魏时期夯土基址南北长9 米，东西宽14.5 米，与南墙和西墙相接处均宽7.5 米。北周时期夯土基址规模略有扩大，南北长扩至16 米。各种迹象显示，当时在宫城西南角应设置有重要的建筑设施。

在宫城西南角内侧还发现一些给排水设施，主要为一处大型砖砌水池和 4条砖砌水渠，时代均不晚于北魏时期。砌砖水池平面略为长方形，东西残长5.5米，南北宽9.3 米，深1.4 米。池内填土为夹杂大量绳纹瓦片的青灰色水浸土，池底坚硬，有铺砖痕迹。砌砖水渠皆为暗渠，紧贴宫城西墙内侧有2 条南北向水渠，间距3 米，南端均起于水池北侧，残长皆约27 米，水流均自南向北。沟槽宽约1.4 米，砖槽内宽约0.5 米，两侧砖壁残高0.4 米。水池西北部有一条呈“L”形水渠，南北向水渠残长6.5 米，东西向水渠长18 米，向西下穿宫城西墙后汇入一条大型南北向砖砌暗渠。紧贴宫城南墙内侧也有一条东西向水渠。

在宫城西墙两侧，还分别发现晚于北魏时期的灶坑和排房遗迹。灶坑遗迹位于宫城西墙内侧，西距宫墙5.5 米，有灶坑6 座，南北向有序排列。灶体平面为椭圆形，体量较大，东西长约3.6 米，南北宽约2.3 米，残高0.6 米。据考察，这些烧灶最晚至北朝晚期仍在使用。排房见于宫城西墙外侧，范围较大，发掘区内南北长30 米，东西宽15 米。残存遗迹较差，均为残砖垒砌的宽约0.4 米、高约0.2 米的墙基。房舍排列密集，布局较为凌乱。房址内遗物不多，但发现有北齐“常平五铢”和北周“五行大布”钱币穿在一起的钱串。据地层和出土遗物判断，该晚期房舍可能是北周时期遗存。

4、宫城西墙的发掘解剖

在宫城西南角之北 80 米处，横贯宫城西墙布设70×4米探沟一条。解剖发现魏晋、北魏和北周时期的宫城西墙，以及宫墙外侧的汉晋时期大型河渠、北魏时期排水暗渠、北魏和北周时期路面等遗迹。

最早的宫墙夯土位于北魏宫城西墙内侧，不晚于魏晋时期，由相连的两块夯土构成。夯土黄褐色，总宽8.3 米，外侧厚3.7 米，内侧厚1.5 米。夯土西侧边缘残存有包砖墙被拆毁后的沟槽遗迹，沟槽宽0.6 米，深约3 米，砖痕显示砌砖为46×23×11 厘米的大型砖。城墙内侧地面已无存，推测当时城内地面较高且被晚期遗迹破坏；城墙外侧有宽约4 米的护坡，即外侧地面。由此推测，魏晋时期宫城内侧地面高于外侧约3.5 米，当时是依据地势，围绕着一处高地用夯土包砌修筑宫墙。魏晋宫墙西侧还发现汉晋时期的南北向大型河渠遗迹，东岸距宫墙外侧包砖沟槽4.2 米。河渠开挖在生土中，上口宽29 米，底宽20.4 米，自北向南流水。渠底夯筑有一层夹杂大量河卵石和碎瓦片的黄褐色土硬面。河渠内淤积有近3 米厚的灰黑色淤土，为多个时期淤积而成，显然沿用时间较长。在河渠淤积土之上，还叠压有多层魏晋至北朝时期的瓦砾堆积、淤积土和路土等遗迹。

北魏时期宫城西墙位于魏晋宫墙外侧 1.7～2 米处，夯土为灰褐色，基槽开挖在汉晋时期河渠淤土中，底部下挖到河渠底部的碎瓦砾硬面上。基础夯土上层较宽，东西宽7.4 米，厚2.2 米；下层较窄，东西宽1.9～2.5 米，厚1.8 米。地上墙体夯土残高0.5 米，东西宽5.8 米。宫墙外侧保存有较好的北魏时期路面，东西残宽11～15 米，厚0.1～0.25 米。路面略呈东高西低缓坡状，局部铺垫有较多河卵石。北魏宫墙西侧2.7 米处路面之下，还发现一条北魏时期的大型砖砌暗渠，自北向南流水。其基槽也是在汉晋时期河渠淤土中开挖而成，断面呈倒梯形，上口宽3.8 米，底部宽3.5米，上部填土经过夯筑，夯层厚0.1～0.2 米。基槽内砖砌涵洞内宽1.4 米，高约1.3 米，顶部为双层拱券。

在北魏时期宫墙夯土之上，还压有北周时期的夯土墙基。东西宽 1.8～3.8米，残厚0.4～0.7 米，系在北魏宫墙基础上修筑或改建而成。该北周宫墙外侧，也叠压有北周时期的路面遗迹，东西残宽9 米，厚0.1～0.2米。

三、北魏宫城中枢区南部勘察的主要收获

1、对汉魏洛阳故城北魏宫城中枢区南部的勘察发掘，使宫城正门阊阖门、二号宫门、三号宫门以及宫城西南角的位置有了确切的具体定位。这样，一方面

为今后该城历代城址布局复原研究提供了重要参照基点；另一方面，作为具有明确政治意义的宫前礼仪建筑，它们也将成为其它都城宫城同类建筑发掘的基础。

2、对北魏宫城中枢区南部三座主要建筑的发掘，对其规模尺度、形制结构和空间分布有了进一步认识。它们皆位于宫城主要建筑轴线上，且由南向北依次规整排列，显然是宫城正殿太极殿正前方的重要屏障建筑。从考察的遗迹现象观察，既存在着规划布局的一致性，也存在着因位置不同建筑形制结构的差异。这对研究汉魏时期都城的宫城形制极为重要，同时也为进一步考察研究和保护展示提供了重要基础资料。

3、对北魏宫城西南隅及宫墙基址的解剖发掘，对明确北魏宫城的空间范围和时代演变极为重要。首先，发掘廓清了北魏宫城的空间范围，尤其是西界的位置；其次，以完整和清晰的地层关系，揭示出了不同时期宫城城墙的修筑与改建，进一步明确了该宫城始建不晚于魏晋时期，历经北魏和北周时期的沿用，其范围和形制基本未有大的改动；再次，宫城西墙外侧发现的汉晋时期大型河渠遗迹，基本可以确认就是《水经注》等文献记载的汉魏时期“阳渠”遗迹，这对于深入探讨汉魏洛阳故城的城市布局、河道水系的构成和演变有重要的意义。

4、由于考古勘察确定了北魏宫城阊阖门、二号宫门、三号宫门和宫城墙垣等基址皆始建于曹魏时期，由此也基本确认了汉魏洛阳故城自曹魏时期就已采用单一宫城居北居中、宫城正殿称为太极殿、宫前出现轴线大街的格局。这种新的都城形制布局极为重要，其将中国古代都城汉代以前的“面朝后市”形制布局，变化为“建中立极”的一种崭新格局，影响极为深远。不仅后续的北魏宫城是在魏晋宫城基础上直接建造沿用，就是后世移地重新建都的隋大兴与唐长安城、隋唐东都洛阳城、北宋东京城、元大都和明清北京城，显然都是这种新格局的延伸发展。而日本的平城京虽然更直接是沿袭了隋大兴和唐长安城的形制布局，但其和藤原京等日本都城的布局，也仍然可以从上述新格局中寻找渊源。

5、发掘出土的大量具有明确地层关系的建筑材料等遗物，对于完善和深化汉魏洛阳城出土遗物的编年序列有重要的作用。

总之，这些考古勘察工作，不仅对汉魏洛阳都城形制演变的研究具有重要意义，也是中国乃至东亚地区古代都城规划研究的重要收获。

注　释：

① 中国科学院考古研究所洛阳工作队：《汉魏洛阳城初步勘查》，《考古》1973年4期。

② 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队：《河南洛阳汉魏故城北魏宫城阊阖门遗址》，《考古》2003年7期。

③ 中国社会科学院考古研究所、日本独立行政法人国立文化财机构奈良文化财研究所联合考古队：《河南洛阳市汉魏故城新发现北魏宫城二号建筑遗址》，《考古》2009年第5期。

④ 《魏书·郭祚传》：“（世宗）下诏：‘御在太极，驺唱至止车门；御在朝堂，至司马门。’”

新羅王京の都市構造と発展過程

国立扶余文化財研究所 学芸研究室長　黄　仁鎬

新羅王京の概要

新羅は紀元前57年、慶州地域の斯盧国を母体として成立したのち、周辺の辰韓小国を統合、六伽倻を相次いで征服し、強力な古代国家に成長した。7世紀には百済と高句麗を次々に併合し、ついには羅唐戦争（670～676年）に勝利して統一を成し遂げた。935年、高麗の王建によって滅ぼされるまで、千年の歴史を積み重ねてきた新羅の首都慶州に、新たな形態の計画都市が造成されはじめたのは、6世紀に入ってのことである。月城と皇龍寺が位置する王京の中心部に、碁盤目状の道路網の整備と、坊制を基礎とする市街地が区画され、王京の都市構造や景観は大きく変貌を遂げていった。

当時は、地方の統治組織を本格的に整備する一方、中央の官制を改編し、律令を公布（520年）するなどの一連の制度改革を通じ、国家の統治基盤を確立していた時期であった。また、仏教の公認（528年）による興輪寺（544年）、皇龍寺（553年）の創建は、護国仏教思想を発展させる契機となり、漢江の下流を占領した6世紀中頃からは、中国と直接交流することが可能となった。こうした政治・社会的背景をもとに、中央集権的統治体制を確立し、王権を強化することを目的に、体系的な都市開発を伴う王京整備が行われた。これは、坊里の設定といった行政区域改編の実質的な後続措置であり、既存の六部を統制、管理することが可能な王京の行政体系の中に、吸収・再編する過程ととらえられる。

都城の内側に街路区画を特徴とする都市空間が構成されはじめるのは、同時期の百済の泗沘城（538年）と高句麗の長安城（後期平壌城、586年）も同じである。泗沘羅城の内側、そして長安城の外城に、一般民衆の居住地を含む各種インフラ施設が規則的に区画された空間の中に配置されていたことが明らかとなっている。都城の構造や形態において細かな違いはあるものの、南北朝時代を経て定型化した中国式都城制が、各国の状況にあわせて適用され、それ以前と

黄　仁鎬（Hwang In-ho）（おう・じんこう）
国立扶余文化財研究所 学芸研究室長
1971年　ソウル生まれ
2008年　東亞大学校大学院考古美術史学科博士課程修了
1997年　国立慶州文化財研究所研究員
1999年　国立文化財研究所学芸研究士（慶州、昌原、大田）
2007年　国立中原文化財研究所学芸研究室長
2011年　現職
現在の専門分野は、考古学（都城）。

6世紀中葉に始まった新羅王京の改編に伴う都城内部の都市化過程の背景や様相を探り、月城が拡大・変化していく過程、さらには新羅王京の特徴的な坊里構造と段階ごとの変化様相についてご紹介いたします。同時に時間があれば新羅王京と百済都城遺跡の最近の発掘成果などを紹介し、比較検討する機会をもちたいと思います。

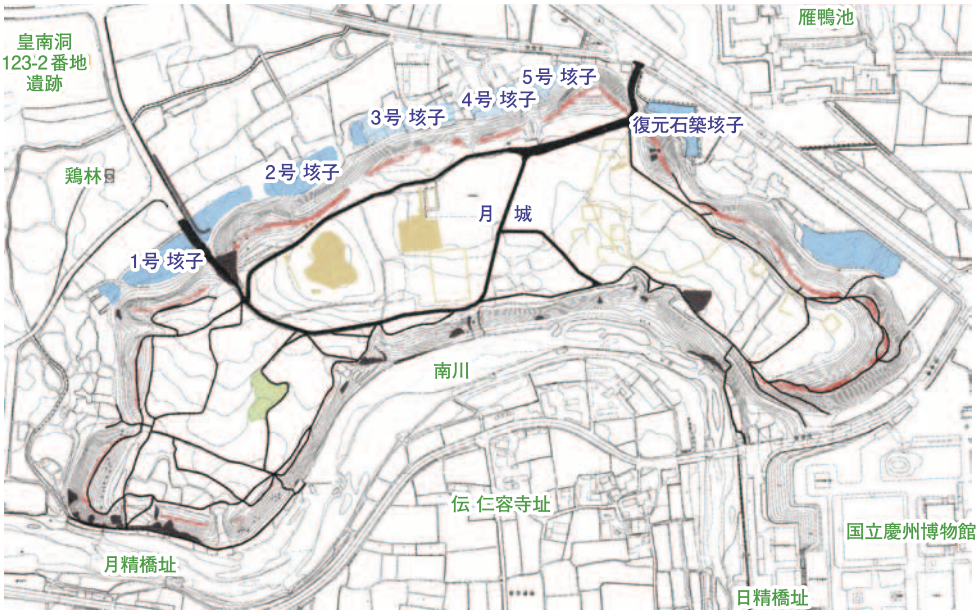

図1　月城と垓子（濠）

は違ったパターンの都城として発展していく。王宮や官衙区域の周辺に都市空間が造成されはじめたのは、おおむね6世紀の中・後半と似通っているが、新羅王京の場合、都市化は一度にはなされずに段階的に進められ、完成するまでに約200年の歳月がかかった。

月城の拡大

新羅王京の中心部には正宮の置かれた月城がある（図1）。婆娑王22年（101年）に築かれた月城は、王が暮らすという意味の在城、もしくはその形から新月城とも呼ばれた。月城以外に、赫居世21年（紀元前37年）の金城築城に関する記載があるが、慶州邑城付近や隍城公園一帯であると推定されてはいるものの、まだその実態は明らかになっていない。一方、金城は別の宮城ではない王城、すなわち月城を指すか、もしくは都城全体を指すとする見方もある。

《三国史記》地理志によれば、新月城の北側に満月城があり、その周囲は1,838歩であったとあり、主に（新）月城の北側に宮域が拡張されたと考えられている。月城の北東には東宮址と月池（雁鴨池）が隣接しており、宮殿、もしくは官衙区域とみられる大型の建物址群が月城の北西（鶏林と瞻星台のあいだ）に密集している。また、月城の南東に隣接する慶州博物館の敷地からは「南宮之印」銘瓦当が出土し、南宮、もしくは南宅（金入宅－貴族の屋敷）とする見方もある。このように月城を中心に、周辺に東宮と南宮、官衙施設などが加えられた王宮の拡張部分までを満月城とみることができる。文武王19年（679年）に宮殿を修造し、東宮を築造した事実は、月城周辺の殿閣建物址から出土した「儀鳳四年皆土（679年）」銘平瓦と「調露二年（680年）」銘宝相華紋塼からもうかがえる。

統一新羅初期に王宮が拡張された過程は、月城垓字（垓字＝濠）の発掘でも確認された。月城は河川に面している南側の城壁を除いた残りの区間に人工の濠を備えており、いくつかの独立した濠が城壁に沿って一定の間隔で配置されている。この蓮池形の濠は、5世紀末に造成され、炤知王9年（487年）の月城修築に関する記載と関連するとみられる。また、防御施設である蓮池形の濠が閉鎖され、造景的な要素が強い石築垓字が新たに改築された時期が、他でもない月池（674年）及び東宮（679年）の造成段階であったことも明らかとなった。それ以外にも同時期には、月城の北西に多数の大型の建物が建てられ、水路と橋が改築され、月城外部の都市空間へとつながる道路が設けられるなど、月城の拡大及び変化過程を示す多くの発掘成果があった。

推定北宮址（殿廊址）

都城における中核施設は王宮であり、その位置及び範囲が都城の構造や形態を決定づけるという点で、月城の変化過程は王京研究において重要な部分を占める。炤知王10年（488年）に臨時の王城であった明活

城から月城に王宮が移された頃、月城の大規模修築が完了し、奈乙（ネウル）神宮の造営、郵驛（公文書の伝達、官物の輸送、地方に出向く役人などの宿泊などを司った機関）の設置、官道の修理など、さまざまな国家事業が並行して行われた。この時、王宮城に格上げされた月城の権威は、統一直後に月城の宮殿区域が北側に拡張された後も続いたとするのが一般的な見方である。

一方、北宮と推定される城東洞の殿廊址が、新羅中代以降の正宮であった可能性も提起されている。殿堂址と長廊址が大規模に分布している殿廊址は、月城の北側1.2キロ以上離れた北川のほとりに位置する。市街地が北川以北に拡張される前までは、都城の北側中央に該当し、南北中軸線が月城とつながっていた。このような特徴から唐の長安城や奈良時代の平城京と立地上類似した構造であったとみる意見もある。また、恵恭王3年（767年）に3つの星が北宮の庭もしくは王庭に落ちたという文献記録をもとに、北宮にあたる殿廊址が王宮であると推定されたりもする。一方で、南宮の例のように北宮が王宮（満月城）に付属した宮殿の一つとみると、それは月城にほど近い雁鴨池の

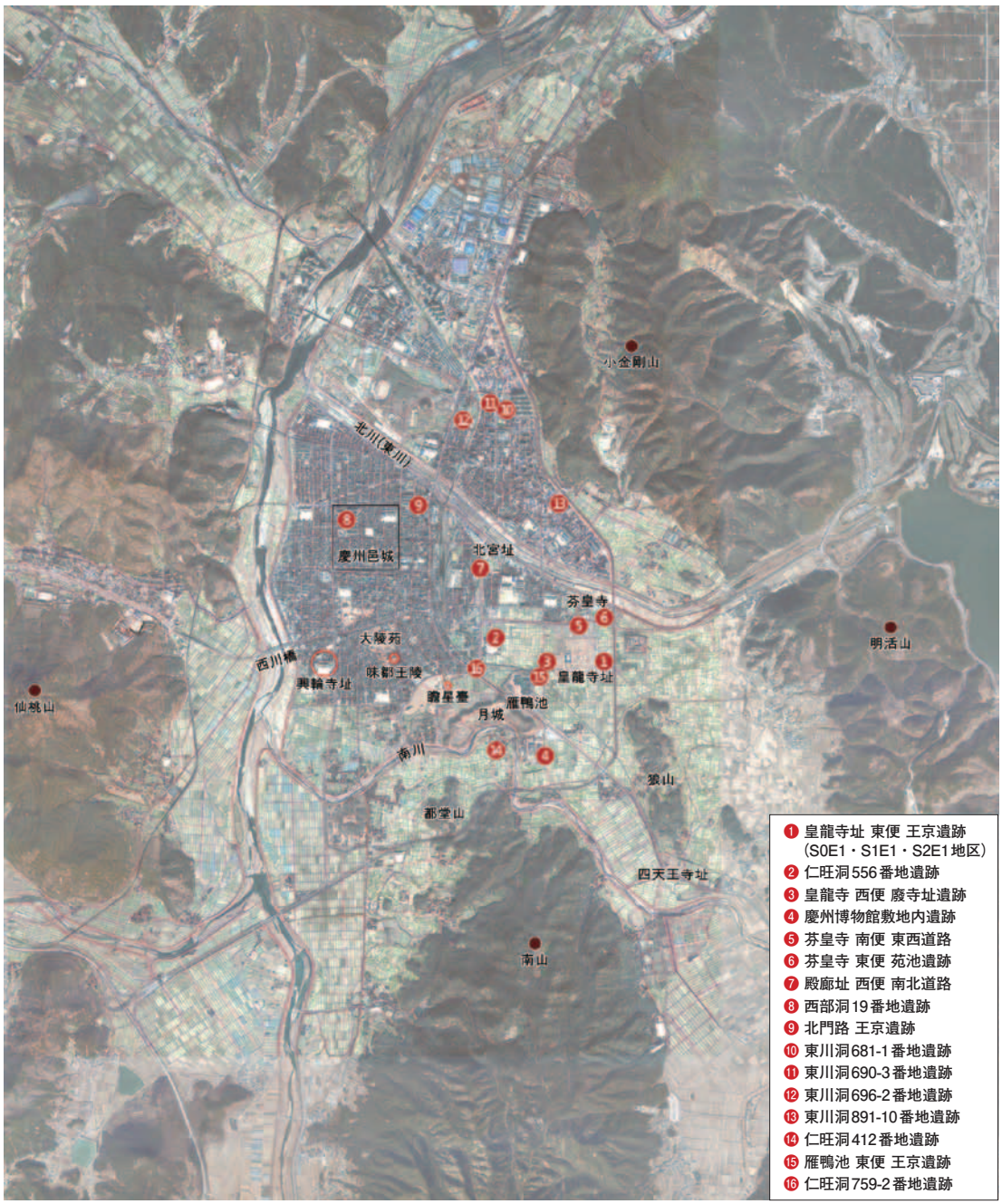

図2　慶州地域主要王京遺蹟

西側近辺にあったはずで、統一期においても依然として王宮が月城にあったことを示す関連史料が多いという意見もある。何よりも城東洞の殿廊址と月城を南北につなぐ、いわゆる朱雀大路が推定区間の発掘によって確認されず、殿廊址の規模が月城に比べ、極めて狭く、坊制による王京の都市化が6世紀の中・後半にすでに月城を中心に進められていたという点からも、殿廊址は正宮ではなく別宮程度のものであったと考えられる。

王京の範囲（図2）

新羅は建国以来、一度も遷都したことがなかったため、都市計画においても多くの制約が伴わざるを得なかった。しかも王京の改編過程が長期にわたり、段階的に行われたため、他の都城とは異なる独特な構造をとる。新宮もまた（遷都計画がなかったわけではないが）実現されず、別宮を建設したり、首都の偏在性を文武王から神文王の時代に完備した五小京（地方の特別行政区域）の設置で補完する程度であった。

王京の規模は《三国史記》地理1に「王都 長3,075

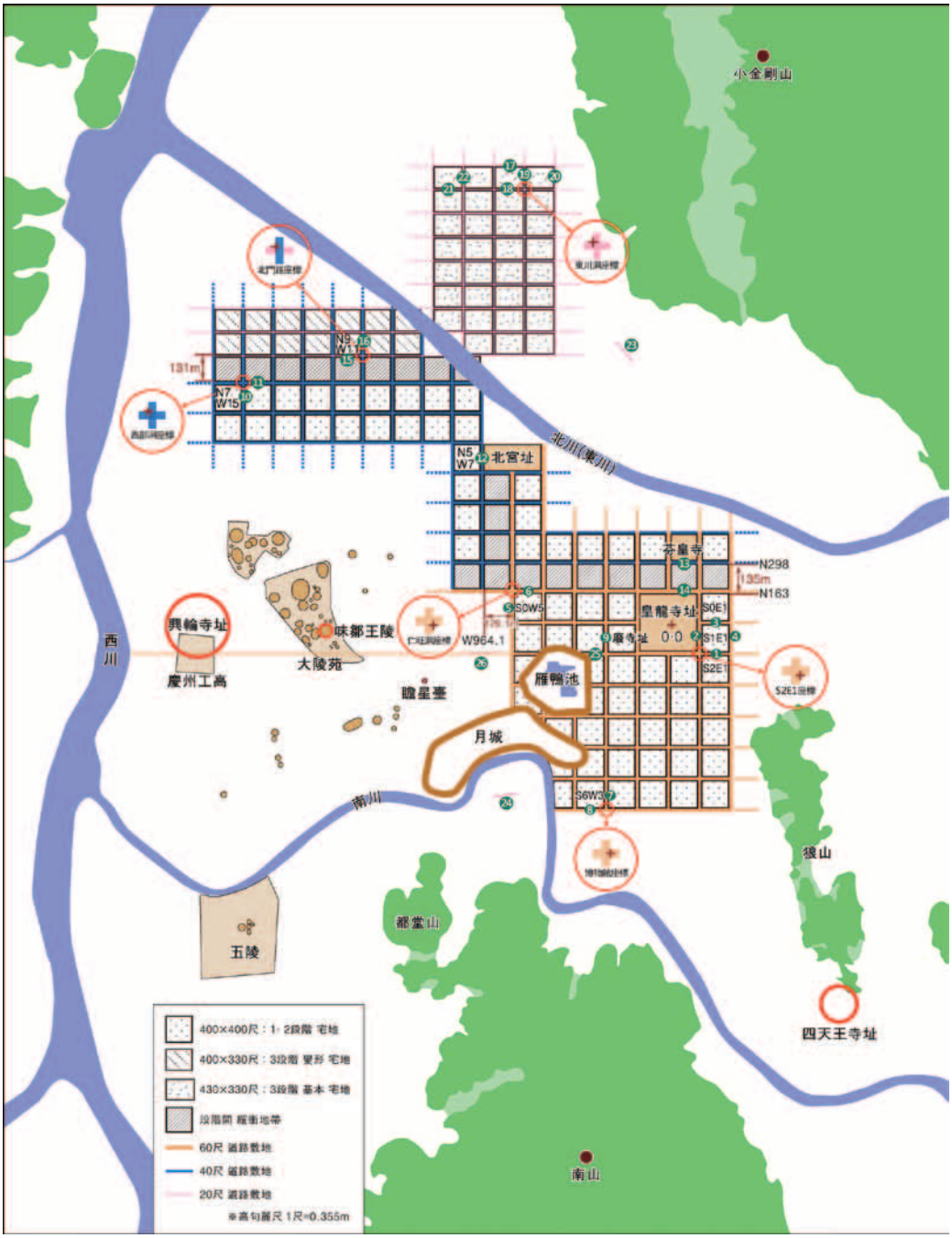

図3　新羅王京の段階別市街地区画模式図

歩 廣3,018歩 35里 6部」と記載されており、高句麗尺5尺1歩を基準とすると、南北5.4キロ、東西5.3キロに達する。実際に、王京の北と南の境界とみられる隍城洞一帯と蘿井近隣でそれぞれ新羅時代の都市遺跡が確認されており、文献にある南北の規模を裏付けている。また、王京の西側の境界である西川で区画された形跡が残っている真平王陵東側の明活山のふもとまでの東西最大距離も記録の内容と合致する。しかし、慶州盆地の外郭には山城などが築かれ、王京の範囲を確定する羅城は存在しなかったため、都城の形態は不整形をなす。羅城の代わりとなった都城の防御施設には、東側の明活山城、南側の南山新城、西側の西兄山城などがあり、おおむね真興王から真平王の時代に完備されたといわれている。一方、慶州を南から北に貫通する兄山江（西川）は、最後まで王京の西側の境界となり、その東側の支流である南川（蚊川）や北川の場合、一定期間、王京の南と北の境界の役割を果たしたが、最終的にはこれら二つの河川を越えたところまで都市が拡張された。

坊里の構造

新羅は6部の下に35里（もしくは55里）と360坊（もしくは1,360坊）をおき、東市（509年）と西市・南市（695年）という3つの市場を運営、全盛期には王京内に17万戸以上が居住していたことが《三国史記》や《三国遺事》の関連記事からうかがえる。発掘調査を通じて区画単位の規模が明らかになった坊が王京の最小行政区域であり、約360個の坊が王京6部の下の里に従属していたと考えられている。行政区域の改編時期に関しては、慈悲王12年（469年）に京都の坊里名を定めたという記録がある。5世紀に市街地区画が実施されたことを示す調査例はまだなく、慈悲王時代の記事は実質的な王京改編を示しているとはいえない。実際、王京の中心部にあたる月城と皇龍寺周辺で街路区画が始まった時期は、皇龍寺が創建された頃である6世紀中半以降であることが、発掘調査を通じて明らかにされている。坊と想定される460尺（約163.3メートル）を基本単位とする碁盤目状の空間分割方式が確認されたのである。

段階的都市化

王京の都市化は月城の北東辺一帯を皮切りに、北川と南川を越えた外郭地域まで段階的に行われた（図3）。草創期には月城を南側中央として、西側の陵墓地区の真向かいにある皇龍寺周辺地域において小規模な都市整備が行われた。三国統一以降には、国家の発展とともに人口の流入が増加するなど、王京拡張の必要性によって少なくとも2度の拡大改編が実施された。

各段階ごとに坊の大きさや形態が多少調整され、場合によっては地形条件にあわせた変形構造も生まれたが、それぞれを連結するように新旧の分割方式が適宜使用されるという特徴が認められる。王京の道路幅は、周辺の状況によって流動的で、60尺（1段階）、40尺（2段階）、20尺（3段階）と均等に道路用地が拡張されたことが明らかになっている。王京の拡大改編による段階別空間分割単位（道路用地を含む）は次のとおりである（尺度は高句麗尺（1尺35.5センチ）を基準とする）。460尺×460尺 → 440尺×440尺 → 北川以北 450尺（東西）×350尺（南北）/ 南川以南 380尺×380尺。

王京整備は結局、王城である月城を中心に行われたが、各段階で都市計画の基準となった拠点施設は、1段階は皇龍寺、2段階は北宮とそれぞれ異なり、3段階は特に拠点施設を設けずに地形条件にあわせたものとみられる。段階別拠点施設は、王京整備以前から存在した主要幹線道路と有機的な関係をなしている。皇龍寺の周辺には重要な幹線道路がいくつかあり、それが市街地区画の基準線として活用された。まず皇龍寺の南門前の広場から西側にある興輪寺の前方道路（慶州工高付近）へと続く東西道路がある。これは金橋（西川之橋）を渡り、大邱方面へと続く。また、月城の東の境界である南北道路、そして皇龍寺を中心にして東側にあたる南北道路は、狼山の西側のふもとを通過し、北は浦項、南東は蔚山方面へとつながる。一方、月城と北宮址を南北につなぐ道路は、すでに1段階の都市整備において、西側の境界線としての役割も果たした。最近、慶州博物館の南側一帯と雁鴨池東側で大規模な王京遺跡の調査が行われており、王宮（満月城）と都市空間の関係をうかがうことができる。

新羅王京의 都市構造 및 發展過程

国立扶余文化財研究所　黄仁鎬

新羅王京 概要

新羅는 기원전 57년 慶州지역의 斯盧國을 모체로 성립한 뒤 주변의 辰韓 小國들을 통합하고 六伽倻를 잇달아 정복하며 강력한 고대국가로 성장하였다. 7세기에는 百濟와 高句麗를 차례로 아우르고 羅唐戰爭(670~676년)을 끝으로 통일국가를 이루었다. 935년 高麗의 王建에게 멸망하기까지 천년의 역사를 이어온 신라의 수도 경주에 새로운 형태의 계획도시가 조성되기 시작한 것은 6세기 들어서의 일이다. 月城과 皇龍寺가 위치한 王京의 중심부에 격자형 도로망이 설치되고, 坊制를 기초로 한 시가지 구획이 이루어지면서 왕경의 도시구조 및 경관이 크게 변모하기 시작하였다.

당시는 지방의 통치조직을 본격적으로 정비하는 한편 중앙의 관제 개편, 율령 반포(520) 등 일련의 제도 개혁을 통하여 국가의 통치기반을 확립하던 시기이다. 또한 불교 공인(528)에 따른 興輪寺(544), 皇龍寺 창건(553)은 護國佛敎思想을 발전시키는 계기가 되었고, 漢江 하류를 점령한 6세기 중엽부터는 중국과의 직접 교류가 가능하게 되었다. 이와 같은 정치, 사회적 배경을 바탕으로 중앙집권적 통치체제를 확립하고 왕권을 강화하기 위하여 체계적인 도시개발을 수반한 왕경 정비가 실시되었다. 이는 坊里 설정과 같은 행정구역 개편의 실질적인 후속조치였으며, 기존의 六部를 통제와 관리가 가능한 왕경의 행정체계 속으로 흡수, 재편하는 과정으로 이해할 수 있다.

도성의 내부에 街路區劃을 특징으로 하는 都市空間이 구성되기 시작한 것은 같은 시기 百濟의 泗沘城(538)과 高句麗의 長安城(後期 平壤城, 586)에서도 확인되는 양상이다. 泗沘羅城의 내부, 그리고 장안성의 外城에 일반 백성의 거주지를 포함한 각종 기반시설이 일정하게 구획된 공간 속에 배치된 사실이 밝혀지고 있다. 도성의 구조나 형태에 있어서는 세부적인 차이가 있지만, 南北朝時代를 거치며 정형화된 中國式 都城制가 각국의 상황에 맞게 적용되면서 이전과는 다른 패턴의 도성으로 발전하게 되었다. 왕궁과 관아구역의 주변에 도시공간이 조성되기 시작한 시점은 대체로 6세기 중후반으로 비슷하지만, 신라 왕경의 도시화는 일시에 이루어지지 못하고 단계적으로 진행되어 최종 완성까지는 약 200년의 세월이 흘렀다.

月城의 擴大變化

신라 왕경의 중심부에는 正宮이 소재한 月城이 자리하고 있다. 婆娑王 22년(101)에 축조된 월성은 임금이 거처한다는 뜻의 在城, 또는 생긴 형태에 따라 新月城으로도 불렸다. 월성 이외에 赫居世 21년(B.C.37)의 金城 축성기사가 있는데 慶州邑城 부근이나 隍城公園 일대 등으로 추정하지만 아직 그 실체가 밝혀지지 않았다. 한편 금성은 별도의 궁성이 아닌 王城 즉, 月城을 가리키거나 도성 전체를 지칭하는 것으로 보는 견해도 있다.

《三國史記》地理志에 新月城의 북쪽에 滿月城이 있으며 둘레가 1,838步라 하였는데, 주로 (신)월성의 북쪽으로 궁역이 확대된 것으로 이해되고 있다. 월성의 북동쪽에는 東宮址와 月池(雁鴨池)가 인접해 있고, 궁궐 또는 官衙구역으로 추정되는 대형 건물지군이 월성 북서편(鷄林과 瞻星臺 사이)에 밀집되어 있다. 또한 월성의 남동쪽에 인접한 경주박물관 부지에서는「南宮之印」銘 기와가 출토되어 南宮 또는 南宅(金入宅)으로 추정되기도 한다. 이같이 월성을 중심으로 주변에 동궁과 남궁, 관아시설 등이 추가로 배치된 왕궁의 확장 범위를 만월성으로 볼 수 있다. 文武王 19년(679)에 궁궐을 중수하고 동궁을 축조한 사실은 월성 주변의 전각건물터에서 두루 출토된「儀鳳四年皆土」銘 평기와(679)와「調露二年」銘 보상화문전(680)을 통해서 알 수 있다.

統一新羅 초기에 왕궁이 확대되는 과정은 月城垓字의 발굴에서도 확인되었다. 월성은 하천과 맞닿아 있는 남쪽 성벽을 제외한 나머지 구간에 인공해자를 갖추었는데, 몇 개의 독립된 웅덩이가 성벽을 따라 일

정한 간격으로 배치된 형태였다. 이 연못形 垓字는 5세기 말에 조성되어 炤知王 9년(487)의 월성 수축 기사와 관련이 있다. 특히 방어시설인 연못형 해자가 폐쇄되고 조경적 요소가 강한 石築垓字가 새롭게 개축된 시기가 다름 아닌 월지(674) 및 동궁(679)의 조성 단계인 것으로 밝혀졌다. 이외에도 같은 시기 월성의 북서편에 다수의 대형 건물들이 세워지고, 수로와 다리가 개축되었으며, 월성 외부의 도시공간으로 연결되는 도로가 개설되는 등 월성의 확대, 변화 과정을 반영하는 많은 발굴성과가 있었다.

推定 北宮址 (殿廊址)

都城에 있어 가장 핵심시설은 王宮이며 그 위치 및 범위가 도성의 구조나 형태를 결정짓는다는 점에서 月城의 변화과정은 왕경 연구에 있어 중요한 부분을 차지한다. 炤知王 10년(488)에 임시 왕성이던 明活城에서 月城으로 거처를 옮길 무렵 월성의 대규모 수축이 완료되었고, 柰乙 神宮 축조, 郵驛 설치, 官道 수리 등 여러 가지 국가사업이 병행되었다. 이때 王宮城으로서 한층 격상된 월성의 위상은 통일 직후 월성의 궁역이 북쪽으로 확대된 이후로도 계속되었다는 것이 일반적인 견해이다.

한편 北宮으로 추정되는 성동동 殿廊址가 신라 中代 이후의 正宮이었을 가능성도 제기되었다. 殿堂址와 長廊址가 대규모로 분포하고 있는 전랑지는 월성의 북쪽으로 1.2 km 이상 떨어진 北川 변에 위치한다. 시가지가 북천 이북으로 확장되기 전까지는 도성의 북쪽 중앙에 해당하며 남북중축선이 월성과 서로 연결되어 있다. 따라서 唐의 長安城이나 奈良時代의 平城京과 입지 상 유사한 구조였을 것으로 본 것이다. 또한 惠恭王 3년(767)에 세 개의 별이 北宮庭 또는 王庭에 떨어졌다는 문헌기록을 근거로 북궁인 전랑지가 왕궁으로 추정되기도 한다. 그러나 이와 관련하여 南宮의 예와 같이 북궁이 왕궁(滿月城)에 부속된 궁궐의 하나로 본다면 월성에서 멀지 않은 안압지 서쪽 인근에 있었을 것이고, 통일기에도 여전히 왕궁이 월성에 소재했음을 반영하는 관련 사료가 많다는 의견도 있다. 무엇보다 성동동 전랑지에서 월성을 남북으로 잇는 소위 朱雀大路가 예상 구간의 발굴 결과 확인되지 않았고, 전랑지의 규모가 월성에 비해 매우 협소하며, 坊制에 의한 왕경의 도시화가 6세기 중후반에 이미 월성을 중심으로 진행되었다는 점에서 전랑지는 정궁보다는 別宮 정도로 이해될 수 있다.

王京의 範圍

신라는 건국 이래 단 한차례도 遷都한 바 없기 때문에 도시계획에 있어 많은 제약이 따를 수밖에 없었다. 더욱이 왕경의 개편과정이 오랜 기간에 걸쳐 점진적으로 이루어져 여타 도성과 구분되는 독특한 구조로 발전하게 되었다. 新宮 또는 천도계획이 없었던 것은 아니지만 실현되지 못했고, 別宮을 건설하거나 수도의 偏在性을 文武王~神文王代에 완비된 5小京의 설치로 보완하기도 하였다.

왕경의 규모는《三國史記》地理1에「王都 長3,075步 廣3,018步 35里 6部」라 하여 高句麗尺 5尺1步를 기준으로 하면 남북 5.4 km, 동서 5.3 km에 달한다. 실제 왕경의 북쪽과 남쪽 경계로 추정되는 隍城洞 일대와 蘿井 인근에서 각각 신라시대 도시유적이 확인되어 문헌의 남북규모를 뒷받침하고 있다. 또한 왕경의 서쪽 경계인 西川에서 구획 흔적이 남아 있는 眞平王陵 동쪽의 明活山 자락까지 최대 동서거리가 기록의 내용과 부합된다. 그러나 경주분지의 외곽에는 산성들이 축조되었고 왕경의 범위를 확정짓는 별도의 羅城이 존재하지 않았기 때문에 도성의 형태가 부정형을 이루고 있다. 나성을 대신한 도성의 방어시설로는 동쪽의 明活山城, 남쪽의 南山新城, 서쪽의 西兄山城 등이 있으며, 대체로 眞興王~眞平王代에 완비된 것으로 알려져 있다. 한편 경주를 남에서 북으로 관통하는 兄山江(西川)은 줄곧 왕경의 서쪽 경계가 되었고, 그 동쪽 지류인 南川(蚊川)과 北川의 경우 일정 기간 왕경의 남┌북쪽 경계를 이루었다가 최종적으로는 두 하천 너머까지 도시가 확장되었다.

坊里 構造

신라는 6部 아래에 35里(또는 55里)와 360坊(또는 1,360坊)을 두고, 東市(509)와 西市┌南市(695) 등 3개의 市場을 운영하였으며, 전성기에는 왕경 내에 17萬戶 이상이 거주했음을《三國史記》와《三國遺事》의 관련 기사를 통해 알 수 있다. 구획단위의 규모가 밝혀진 坊이 왕경의 최소행정구역이며, 대체로 360개 坊이 왕경 6부 아래의 里에 종속된 것으로 이해되고 있다. 행정구역의 개편 시기와 관련해서는 慈悲王 12년(469)에 京都의 坊里名을 정했다는 기록

이 있다. 5세기에 시가지구획이 실시되었다는 조사예가 아직 없기 때문에, 자비왕대의 기사 내용은 실질적인 왕경 개편을 반영한다고 할 수 없다. 실제 왕경의 중심부에 해당하는 月城과 皇龍寺 주변에서 街路區劃이 시작된 시기는 황룡사 창건 무렵인 6세기 중반 이후로 밝혀졌다. 여기서 坊으로 상정되는 460尺(약 163.3m)을 기본단위로 하는 격자형 공간분할 방식이 확인되었다.

段階的 都市化

왕경의 도시화는 月城의 북동편 일대를 시작으로 北川과 南川 너머의 외곽지역까지 점진적으로 이루어졌다. 초창기에는 월성을 남쪽 중앙에 두고 서쪽의 陵墓지구와 대칭되는 황룡사 주변 지역에 대한 소규모 도시정비가 이루어졌다. 삼국통일 이후에는 국가발전과 더불어 인구 유입이 늘어나는 등 왕경 확장의 필요성에 따라 최소 2차례의 확대 개편이 이루어졌다.

각 단계별로 坊의 크기나 형태가 다소 조정되었고 경우에 따라서는 지형조건에 맞춘 변형구조도 생겼으나, 서로 연결될 수 있도록 新舊의 분할방식을 적절히 혼용한 특징이 확인되었다. 여기서 王京道路의 路幅 자체는 주변 상황에 따라 유동적으로 결정되는 것이며, 설계 당시에는 60尺(1단계), 40尺(2단계), 20尺(3단계)으로 균등하게 道路敷地가 획정되었음이 밝혀졌다. 왕경의 확대개편에 따른 단계별 공간분할단위(도로부지 포함)는 다음과 같다. 이때 기준척도는 高句麗尺(1尺 35.5㎝)이다. 460尺×460尺 → 440尺×440尺 → 北川 이북 450尺(동서)×350尺(남북) / 南川 이남 380尺×380尺.

왕경 정비는 결국 王城인 月城을 중심으로 이루어졌지만, 각 단계별 도시계획의 기준이 되었던 據點施設은 皇龍寺(1단계), 北宮(2단계)과 같이 별도로 존재했고, 3단계에는 별도의 거점시설이 없이 지형조건에 맞추었던 것으로 보인다. 단계별 거점시설은 왕경 정비 이전부터 존재했던 주요 幹線道路와 유기적인 관계를 이루고 있다. 황룡사 주변에는 중요한 간선도로가 몇 개 있었고 이것이 시가지 구획의 기준선으로 활용되었다. 먼저 황룡사 남문 앞 광장에서 서쪽의 興輪寺 앞길(慶州工高 부근)로 연결되는 동서도로가 있다. 이것은 金橋(西川之橋)를 건너 大邱방면으로 이어진다. 또한 月城의 동쪽 경계인 남북도로, 그리고 황룡사를 중심에 두고 동쪽으로 대칭되는 남북도로는 狼山의 서쪽 기슭을 남북으로 통과하며 북쪽의 浦項, 동남쪽의 蔚山 방면으로 연결된다. 한편 월성과 북궁지를 남북으로 연결하는 도로는 이미 1단계 도시정비의 서쪽 경계선 역할도 하였다. 최근 경주박물관 남쪽 일대와 안압지 동편에서 대규모 왕경유적이 조사되고 있어 왕궁(滿月城)과 도시공간의 관계를 살필 수 있다.

奈良文化財研究所のホームページはこちら

http://www.nabunken.go.jp/

お問い合わせ先

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
〒 630-8577　奈良県奈良市二条町 2 丁目 9-1
TEL：0742-30-6733　FAX：0742-30-6730
制作：株式会社クバプロ